

印象

自分は果してどう云ふ柄にはまるか、それさへ充分に見分ることが出来たら、失敗するやうなことはあるまい。

六 生き馬の目を抜く

生き馬の目を抜くの才があれば、何時でも何事をか爲し得る。生き馬の目を抜いたやうなものは尠ないとはせぬ。随分辛辣な腕を振ふのがある。殊に株商の間にある。相場師の當つたものに較べれば、普通の營業人は甚だしい馬鹿者に見える。一方は半年の間に何萬圓、何十萬圓或は何百萬圓を儲け、一方は生涯同じ蕎麥屋、同じ鰻屋で終る。幾ら蕎麥屋が流行つても知れたものである。機會をつかむの効力は實に莫大なものである。併し眞に攫むのか、他から攫まして呉れるのか判らぬやうな事もある。一時天下の鈴久と云ふのがあつたが

其の當つた時は誠に驚くべき機敏と見えだが、一つ踏みはづしてから意氣地ない有様となつた。若し人に優れて機敏であるならば、次から次と或機會を攫み得るのである。一度倒れて容易に興り得ぬのは、眞に機敏であるのか、表面の機敏であるのかは疑はしい、氣のきいたものが役に立つ筈なのに、實際に役に立たぬのがあるのもさうである。様子が氣のきいて、もの言つてもうまいけれど、肝腎な事になつて役に立たぬのがある。上つ面の氣のきゝ方である。近頃ハイカラと云ふが下火になり。重にハイカラ女と云ふやうな所に用ゐられて居るが、其のハイカラが兎角輕蔑の語になつて居つたのは、いらざる所に氣がきいて、肝腎な所が抜けたからである。洋服の着方をハイカラ的にする、髪刈り方、洋杖の持ち方をハイカラ的にする。何も悪い事はない。新しいのは夫だけの進歩である。所がこれを笑ひものにするのは、餘り入り用のない事に注意

し肝腎な事を忘れる所に在る。邊幅を修めるのを卑しめるのも肝腎な事を忘れるだらうと認めての上の事である。肝腎な事を忘れず、よく之を果すならば邊幅を修めるのはそれだけ氣の付くのである。氣の付くのに何も悪い事はない。たと氣を付けなくてもよい所に氣を付け、氣を付けねばならぬ所にぼんやりして居るので、下らぬ男とするのである。

ハイカラ男と呼ばれるものは、何處か氣がきいて居りながら何處か間が抜けて居る連中である。才がある、仕事が出来、而して纏まつた成績が上がらぬ。其れは機敏なだけでなく類似機敏である。鍍金機敏である、天麩羅機敏である。斯かる機敏も所に依つて使ひ途があるが、大きな仕事を任す事が出来ぬ。どうも當にならぬので困る。

敏捷で機敏なのは役に立ち、何處でもさう云ふのを望み、才子の世の中と云ふべきであるのに、頑固親爺が中々之れを用ゐず、其の云ふ事を聽かぬのは、全く理がないでもない。敏捷でないのが尠くない。どうでもよい事に氣がきく目から鼻に抜けるやうであつて、肝腎な事にさんと役に立たぬと云ふやうなものがある。目の前の才に惚れ込み之を良い位置に用ゐれば、さんでもない事を出かしこりする。近頃銀行で穴をあけたりするのは、大抵氣のきいた業である。氣がきいたのか一概に信ぜられぬので、頑固親爺が力味んで居る。何時穴をあけぬとも知れぬので、頑固親爺が心配するのも尤もである。

印象 頑固でも困るが、それかといつてたゞ敏捷らしく見えるだけでも困る。眞の敏捷家でありたい。

七 望む者多く當る者少し

これは「大富
小富」の一節
である。

金の世の中と言ひ、人々頻に金を作るに努めるが、何程作らうとするのであるか。出来るだけ作りたいたのであつて、成らうことなら何千萬何億萬といふところに致りたいとするのであらう。斯く望む者の多くして、大富豪の少いのは望んだとて容易に得る事が出来ず。能く當るのが萬人に一人もあるかないかの有様であらう。

所で大富豪になれぬので、仕方なしに思ひ止まる可きであるか、又は初めから大富豪たるを思ひ止まり、小富豪で安んじやうとす可きであるか、疑問に屬する。小富豪とて必ず成れるか成れぬか疑はしいにしても大富豪に成るに比べて頗る容易しいと言はねばならぬ。額の少い程人数も多い。日本で億以上なのは二名しか無く、唯だ早晚一二名の加はらうとするに過ぎない。千萬以上になれば可なりに數多く百萬以上となつては數へ切れぬ。従つて億萬富豪に成らう

とするのは極めて困難であり、額が少くなる程、愈々企て易くなる。

むづかしいから斷念し、易しいから企てるといふのは、餘りに普通の事であつて、勇氣ある者の満足し得べき所でないとも言へる。既に儲けやうと決心しては、儲けた上に儲け、百萬を千萬にし、千圓を億にせねば止まぬといふ位の心得で無くてはならぬと思はれやう。三十歳前後で意氣甚だ盛んな時、五萬十萬も儲ければ大富豪とならうと思ひ立つ。金儲けに従事する者は、順序として大富豪となるを希望すべきものらしい。小富豪、中富豪で安んずるのは、小成に安んずるの嫌ひを免れぬ。人物として小人物なるかに見られる所がある。けれども之は考へ物で、大富豪たるを志すのは、單に困難なる事を思ひ立つばかりで無く、必ずしも順序の當を得たとはせぬ。金儲けは大富豪と成らねばならぬといふやうな事を意味せぬ。金が出来れば可いのであつて、多い少ない

は深く問ふべきでない。幾代とかつて次第に蓄積し、遂に大富豪と成るは格別、一代に大富豪となるは、必と無理が出来、無理をせねばならぬ。僥倖でなければ、際どい事をする必要がある。

僥倖は素りに望む可きで無く、男らしい性分では、一切僥倖を念頭に置かぬが當り然である。際どい事も場合によつて敢てすべく、即ち戦場で敵軍と對抗する際、之を欺くやうな事をするは、已むを得ぬ次第である。けれども、同じ國內にあつて、同胞民衆を欺くのは心ある者の敢てすべきでない。稀れには正當の方法で、一躍大富豪となるものがあるが斯かるは例外であつて、大抵悪い事をして居る。廣く世間に知られぬだけであつて富を作つた道順を明かにせば、言語道斷の事がある。

ロスチャイルドがウオーターロー戦争を英軍敗北と振れ廻し、株を下げて大

儲けしたと云ふのは、世間の語り草となつて居るが、此等は相場界に有り振れの事であつても、決して賞すべきでない。人を欺くのが悪い事ならば、世間を欺くのは愈々悪い。

印象

人間の欲は限りのないものだ。何處まで行つたら、これで宜いと満足するものやら、實際分らないものだ。

八 金の所有者は力の所有者

何しても財産の額は比較的最も判断し易いものであつて、長者鑑の第一に列する者に注意を拂ふは、順序の然る可き所である。第一の長者は衆に先んじて榮典に與る可きものであつて、依りて無財産なるものゝ爲し遂げ得ない事業を成し遂げ得るに相違ない。先立つものは路用の金、何でも先づ金が出来るか

これは「財産」として格別の一節である。

らであつて、其の金を多く所有して居る者が多く力を貯へて居る勘定になる。けれども財産は果して、所有者其人と離る可からざる實際のものであるか。又は其人が所有して居らなくても、何處にか存在して、相當の力を顯し得るものであるか、疑ひを免れぬ。

人が最も苦心し最も奔走する所は金であるやうであるが、金の出来る出来ぬは其人の力量次第であるか何うか。多年刻苦して、漸やく金を作り上げた者が少く無いにしても、全く働かずとも金を積む事出来ぬと限らぬ。親譲りの財産あるものは、赤ん坊で乳を飲んで居りながら、巨萬の金を所有して居るのである。生れて貧乏生活をなし、學校に通學して下宿料の拂へぬ者が富豪の養子となれば、坐ら巨萬の富を得るのである。或は親類に富豪があり、其の家族が死に絶えて遺産を繼ぐ者が無く、近い親類も無いといふので、圖らず自分の手に

落ちて來ることがある。

刻苦黽勉、額に汗を流して財産を造る者もあるけれど、財産は必ず斯くして得ねばならぬとは極まらぬ。濡れ手に粟を掴み得る事もある。單に財産の多いので敬意を拂ふのは、糞味噌を差別せぬ嫌ひが無いでは無い。遊んで居つて貰ひ受けた財産と、汗水垂らして拵へた財産と區別するを要する。而して汗水垂らして貯へ得たる財産は、事業と密接な關係がある。要するに財産よりも事業が肝要であるといふ事になる。

所で、事業も様々である。千差萬別である。唯、金を貸して利息を收め、之で富を爲して居るのがある。之とて全く事業で無いとは言へぬ。人に金を貸し是をして事業を爲すの便利を得しむるのは、間接に事業を爲すのである。けれども金を貸して利息を收めるは、毎日同様の事を繰返へして出來るのであつて

才能に於て何等稱す可き所が無い。計算も出来、相手が無くては出来ぬ事であつても、事業としては甚だ單純な者である。家に居つて帳面を繰、督促状を發し、裁判所に入りするのを専務とするものと、銀行を管理するのと大なる違ひがあるが、畢竟するに程度の違ひである。

大銀行家は特別の技倆を要するとしても、大抵は其人に限るとはせぬ。金さへあれば其人が居らなければ他の人が代つて辨ずる。銀行は世間にある金を集めて、貸し付けるのであつて、元から何處かに存在して居る金である。新たに社會に貢獻する所が少ない。貢獻するのは、人に貸し付けて事業を起すのであつて、時として事業に關係無い事がある。地方で銀行が田畑を差押へ、農民の所有權を得るのは農作物を減らすとも増しはせぬ。安田氏の如き大銀行家となれば、或る事業の興廢にも關するが、それにしても社會に貢獻する事業として

は割合に少い。是れから見れば、前に無かつた事業を起す所の會社は文明に益する所あると云ふ可きである。電氣にしても紡績にしても硝子にしても靴にしても、何でも前に缺乏した所のものを作り出し、或は前に高くて下手であつたのを、安くて上手にすると云ふやうなのは、總て賞す可きである。國産奨勵の趣旨に適ふが如き、大いに賞すべきである。新發明、新意匠は最も望ましいのである。

印象 金持になつて、その利上りで食つて行かうと云ふやうでは、到底守錢奴たるを免れぬ。

九 貧者の一燈よりも長者の萬燈

昔時富豪は、寺に金を寄附し、寺で之を旦那とし金額の多いのを特別に取扱

つたりした。寺では元より長者の萬燈貧者の一燈として平等に取扱ふ可きであつても、そこは坊主だち却て抜け目がなく、零碎の金を集めるよりも、纏まつた金を得る方が手数のかゝらぬので、何とか上手く大旦那を取なすのである。寺にいろ／＼あつて、朝廷で建た物、幕府で建た物、國家で建た物、其外いろ／＼あるが、本願寺が焼けたとかすれば、信徒中の金持か出金する順序になる。山奥の食ふや食はずで蓄へた金を財布に入れた儘、彌陀に差上げやうとするのが随分多く、誠に氣の毒な程であるが、役僧は之を奇特として受けつゝ纏まつた金を得やうとする。

富豪にしても、金は出来、飲食、衣服、家屋、何不足無く、子孫の心配無いにせよ、先を思へば、壽命は幾何となく、死んだ後に、己れ自ら何うなるであらうかと心配になり、地獄の沙汰も金次第、臍の緒切つて以來の大奮發で、相

當に寄附して置けば後生は大丈夫であらう、坊さんもさう言はれたと言ふので名代のケチン坊が金を出す事になる。

現在各所に在る多くの寺院は、種々の事情で建築され、維持され來つて居るが、富豪の寄附も與る事少くない。嘗て、金高は筆太に帳面や立て札に書かれて居つたのである。

歐米を通じて何處にでも立派な寺院が聳えて居り、日本の寺院よりも遙かに金のかゝつて居るのがあるが、其の來歴の様々である中にも、富豪の死後の事を案じて寄附した所が、大なる部分を占めて居る。何處でも目立つて立派な建築物と言へば寺院であつて、後生のために出来上がったのである。

然し最早、寺院は大抵に出来上がり新たに造る必要が無くなつた。今でも新築は無いではないが、他の建築物に比して極めて少ない、近年物質的文明の進

むに伴ひ、昔時の最大なる寺よりも大なる建築物が言葉の爲めに建られる事になつたが、昔時の寺院の代りに多く建築されるやうになつたのは學校である。昔時も學校があつたけれど郡にも地方にも片田舎の村にも、必ず設けられるのは學校である。

戦國で文物の衰へた頃、寺で兒童の教育を爲し、寺小屋といふ語が今まで傳はつて居る。所が一般に教育の必要を感じ、葬式の傍らと云ふわけに行かなくなり。剩つさへ十年二十年前の事を其儘に信ずる事もむづかしく、殊に年々新しくなつて、少しく怠れば損をすると言ふ事が、商工業上で知れては、只管學校に重きを置いたりする。

學校の事が分るにしても分らぬにしても、學校と富國強兵とが密接の關係のある事は獨逸の例を見ても察せられる。獨逸が四十二瓏の大砲を持ち出したのに

驚くばかりで無く之を敵としては染物の色にも困るといふ調子では、益々學術を盛んにせねばならぬ事に思ひ當る。それほごまでに思はずとも、金も相應に出來、因業親爺として死ぬよりも、今少しく愉快に死ぬには、學校が最も善さうに見える。建築物だけでは、年數が経てば破損する。或は内部の必要上改築の已むを得ざる事になる。建物だけでは果敢ないものである。それよりも、小供達を集めて育てる所では、之が段々成長して働き出し、中一ツ角有用な人物も出やうし、時として英雄豪傑が出ぬと限らぬ。

學校の爲めに金を寄附するのが、社會の爲めになり、又一般の受けも好い。成金の最も多い米國では、大小の富豪が學校に寄附する事最も多い。學校の多數は寄附金より成立つて居る。或は一人で立派な大學を設けて居るのがある。富豪同志で寄附の競争して居るのがある。カリフォルニアでスタンフホード未

亡人とハースト未亡人との競争は却々盛んであつた。

印象 金持になると、何うしてか心が汚なくなる。何故人の爲めとか、社
會の爲めとかに散じやうとする心になれないだらう。

一〇 江戸つ子と上方贅六

贅六と云ふ語は何時何處に起つたか、明かでない。瓢六、平六、總領の甚六
など、皆此六と云ふ字を使へば、贅六も其邊に關係があらう。併し大體に於て
江戸つ子に對する、上方贅六である。江戸つ子が誇りであるだけ、贅六をけな
して居つた譯である。江戸つ子と贅六は殆ど正反對であつて、一方宵越の金を
使はぬに反し、他の一方はしみつたれで、吝坊であるとしてあつた。江戸つ
子と云つても、職人や消防夫を指すのであつて、中以上は特別の關係ないやう

これは「贅六」
の一節であ

であるが、職人が宵越の金を使はぬと自慢するのは、旗本の風を受けての事だ
ある。旗本八萬騎、泰平が打續いて怠惰になり、懦弱になり、言甲斐なくなつ
たものゝ、天下の直參として奢り散らした端葉な處が、自づと町人にも移つて
來た。旗本は怠けて衰へても、幡隨院長兵衛とか、俠客肌が町人に持て囃され
殊に自らの腕で自ら食ふ職人連中に在つては、一種意氣を重んずる風があり、
勇み肌と云ふことを喜ぶことになつた。

諸侯の集まる所仕事が多く、働きさへすれば衣食の憂ひがない。素裸身で無
一文でも食ふ丈けのことは出來る。明日の事心配して金を貯へるなど、意氣地
なしの骨頂のやうに見える。宵越の金を使はぬのは取りも直さず、腕に覺えが
あり、能力があり、何處で何うしても食へるといふを示したのである。江戸の
繁華は實に之を容して居つた。處が京阪地方はさうは行かぬ、町人は種々武士

に難題を云はれ、云ふことを聴かねば何んな目に遭ふか知れぬ。實に豊臣氏が亡びて徳川氏が幕府を建てたのは、上方が負けて江戸が勝つたのであつて、その勢ひに準じて居る。豊國大明神の廟は金碧燦爛たるものであつたが、其の金は東照大権現及び其の子孫の廟に塗り替られた。家康の造つた江戸が盛んなるの反比例に、秀吉の作つた大阪が面白くなくなり、流石瀬戸内を控へ、四通八達の要所に當つて居つて、商業に缺くべからざるがため、金を作ることが出来ても、金持と見られれば、何彼の難題を云ひ附かり、好い御用もあるけれど、御用の名の下に取り上げらるゝも同然なのがある、金満家と思はれるのがよく／＼用心せねばならぬ。

町人は有つても無いやうな顔をせねばならぬが、御用を聴いて儲かる事あるが、御用を云ひ附かるやうにもせねばならず。其の邊の振合頗る六ヶ敷い。

大きな取引をする長者が然る心配の状態であつて、小商人も之に準じて用心をする。加ふるに京都は曾て幾度も戦亂に遇ひ、大阪も天下の兵の集まつた所であつて、生命財産を大切にする念が行き直つて居る。江戸の初めから心配なく繁華に繁華を重ね來つたのと違ふ。強く云へば亡國の民、何れ丈か金を以つて居ると云ふので、戦勝者に非道い目にあはされると云ふ關係である。其虐められ虐められ抜いて、他に希望なく、金貯め一方に傾き、時代が金を必要とする頃、自然に力を展ばし來つたのは、聊か猶太人が國を亡ぼされ、諸方で虐められて金持ちとなり、時々金で仇を打つのと似て居る。

権力は何時までも東に偏せず、漸くにして西に遷らうとし、薩長初め關西が力を得、徳川幕府を江戸より一掃し、西の天下を造るに至ると共に、上方贅六が江戸つ子を抑へやうとするやうになつた。薩長は實に豊臣氏側に立つて徳川

氏と戦ひ敗北したものであつた。茲に再び戦つて徳川氏を倒したのである。前
 の關係が忘れたやうであつても、上方贅六が息を復活するは順序の當然であ
 る。京都に豊國廟が再建され、大阪に粗末ながら秀吉の銅像が公園に建設され
 た。而して廢藩置縣の下に武士の常職を解かれ、四民平等、町人は最早武士の
 壓迫を被らぬ、金は儲け次第であつて、儲けた金は法律で保護され、十萬百萬
 千萬と作れるだけ作るが手柄である。金儲けの外に目のない贅六は茲に於て天
 下晴れて大きな顔をする事が出来る。

米國ではオールマイティー、 달러である。白人は拜金宗である。金儲けは文
 明に缺くべからざるものであるといふので愈々金が巾を利かすとなつては、宥
 越の金を使はぬ江戸つ子は全く顔色がない。カラ價値がなくなる。従つて江戸
 つ子が何處へ行つたか分らぬ。つゝかけ草履の無くなつたと共に江戸つ子は無

くなつた。たゞに江戸が東京と名稱の替つたばかりでない、名稱だけならば江
 戸つ子の代りに東京つ子が存在するのであるが、何人も東京つ子と云はぬ。江
 戸つ子は亡びた。上方贅六に敗けてしまつた。宥越の金は使はなんだ江戸つ子
 の子孫は、後れ走せに郵便貯金なんかする。贅六が初め罵る辭であつたのが、
 動もすれば、讀め言葉のやうに聞える。今は或ひは贅六の天下といふべきであ
 る。

印象 江戸つ子も、もう昔のやうな江戸つ子の風が失せて、何うやら贅六
 風になつて來たやうだ。

一 國は弊は人物を不經濟に使ふこと

人物經濟は随分むづかしい。寧ろ物質的經濟よりむづかしい。近頃無駄を省

實世の中

これは「人物
 學」の一節
 である。

く法とか云ふのは皆人物經濟に關する一端である。野蠻と文明と種々の點で違つて居るが、人物經濟の如何が與ふる事少くない。

封建時代には現代から見ても人物の不經濟を極めた事がある。能力の無い者が樞要の位置を占め、能力の勝れたものが低い所に蹲らねばならぬやうになつて居つた。閥の弊も其處にある。何故藩閥が悪いとして藩閥打破の聲が盛んであつたか、勢力無き地方の恨みもあつたらう。嫉妬もあつたらう。然し其聲が天下に響き、何人も之を是認する有様であつたのは、閥の關係で能力に乏しい者が國政を司り、國事を過まりはしまいかとの恐れあつたのである。藩閥出身にも有能の士が無くは無かつたが、一の有能の士があれば其の蔭に幾人と無能の徒が潜んで居る。薩長にも人に限りがある。中央に地方に其れなく配置しては、何うしても無能の徒をまづ引き立てる事になる。無能の徒が勝手な働きを

しては、其の關係者に少なからず弊を蒙る。藩閥の聲は究竟道義に基づいて居る。

藩閥でなくても、又何等閥を設けるの意が無くても、人物の配置の宜しきを得るのは容易に望まれぬ。適材が適所に配置されて居れば、どれ程結構か解らぬ。丸い所に丸い物、三角の所に三角の物、各々配置の宜しきを得て居れば申分が無い。が、生き物の人間を斯く取扱ふは、容易に望む事が出来ぬ。唯成る可く宜しきを得るやうに努むべきであつて、少しづつでも宜しきを得れば、それだけ効果が擧がる。何人も多少之を念とし如何にして能くしやうと心掛けて居る。時々改革沙汰といふのもそれである。

けれども、従つて改めれば従つて弊が現れて来る。今日何處を見ても改むべき事が多い。而して其のうちに必ず適材が適所に置かれて居らない事が存在す

る。適材を適所に配置するのは注意さへすれば何程かなし遂げ得られる。注意する者の眼が利かねば仕方が無いが。普通の判断力を備へれば相應の事が出来る。多くの場合、事が無ければ注意を拂はず、其儘に過ぎて居るのである。或る學校が成績良く、或る學校が成績悪く、或る所が榮え、或る所が衰へる。概ね當事者が此の邊に注意すると否とから來て居る。唯此等は社會の上で甚だ小さい事であり、當事者に任せて置けば宜い。悪くなれば自業自得として差支へ無い。大きな銀行會社になれば、其の一盛一衰、影響する所が少くないにしても、要するに知れたものである。日本銀行が下手な事をすれば、容易ならぬ害があるにしても、取返しがつく。一局部の病氣であつて、全身の衰弱を來すに至らぬ。

國家に於て養成し教育した所の者が豫期の働きを爲さず、徒らに生命を續げただけになつては、損失が急に眼の前に見えぬにしても、何時か現はれるに懸まつて居る。少くも進歩を遂げ得可きに、之を遂げ得ざる事になる。國家社會に働き得る人物を無駄に捨て、了うことになる。其の数が僅かの間は問題にするに足らぬが、年々多くなる傾向があつて、多くなつては由々しい問題である。近年海軍の擴張と共に、將校の養成に力を效す事になつて居り、世間でも士官學校や兵學校や、卒業後に就職口が定まつて居るので、競うて入學しやうとし、志願者が多くなつて居る。引いて將校が頻に増加する。少尉の数が頗る多い。けれども、上に昇る程、數が少ないのみならず、異動も少ない。而して年々將校が増して來る。少尉が中尉となり、大尉となり、それから昇進するのがむづかしい。辛うじて少佐となり其の後昇進がむづかしい。幸に大佐となつても、それから昇進するのは愈むづかしい。大抵大尉邊で追拂はれる。大尉で追

ひ拂はれて如何にすべきか、恩給として知れたものであらう。何とか別職を求めねばならぬ事になる。前には、専ら職務に勵み、開戦となれば一命を抛たうと待ち設けて居つたのが、退職となつてはガリ目算が違つて了ふ。急に職業を求めても適当な事のある可きで無く、其處で困る事になる。

印象 適材を適所に置くといふ語はあるが今日、それが果して行はれて居るだらうか、慨かはいしい譯だ。

一二 罪と罪人の種類

同じく監獄へ行つても、國事犯では人が悪く思はず、或は反つて敬意を拂ふやうな事もある。たゞ破廉恥罪では、致し方が無い事になつて居る。併し、破廉恥罪でも、規定通り監獄にはいつて居れば、少なくとも裁判官の目で罪が消え

これは「罪人」に對する「度」の一節である。

て了うわけである。贈賄し、收賄し詐偽取財しても、何箇月か何年間か苦しい目に逢つて來れば、其の苦しいので、罪は帳消しになる。左程苦しいものでないにしても、或る期限の間自由を剝奪された云ふのが、人として少なからざる損害であつて、其損害で張消しになる。

然るを、監獄から出た者までも、猶ほ社會で苦しめやうと爲るのは、強て人を苛める様な事になる。

泥棒は生れ付きなのがある。何度牢に行つても懲りず、出てから直ぐと泥棒するので、常に用心せねばならぬのが有るにしても、牢に入る者が、皆さうと云ふ事はない。中に往々氣の毒なのがある。悉く泥棒同様にしても、出獄人保護に盡力して居る人が有る傍ら、出獄人の頭を抑へ付けやうとしては、事が撞着する勘定である。

強盜なり、竊盜なり、拘摸なりは、あまり改心もせず、成るだけ警戒して置くべきであるが、是等はどうせ社會の表面に現はるゝものでない。暗い所へもぐつて、暗い仕事をするのである。殆ど社會の制裁の範圍外に居る。斯る種類でなければ一旦悪い事をして、罰せられて懲り、二度と同じ罪を犯さうとせぬ傾きがある。或は位置を占て居る者は、二犯三犯などするものでない。何時でも傍で用心せねばならぬ程物騒なものではない。牢に入つて實に懲りくするのである。それを牢から出た後、なほ社會から葬らうとするのは、情ある社會と云へぬ。

而して是迄牢から出たものは、別段葬られなくとも、自ら葬らうとする形がある。其の自ら葬らうとするのは、果して悪人であるかと云へば、さうは云はれぬ。若し悪人とすれば他に幾らも同様の悪人があり更に輪に輪をかけた様な

悪人もある。

日糖事件の横井時雄氏なり村松愛藏氏なり、悪人と言ひ得るかどうか。村松氏は、救世軍で殊勝に働いて居る。前後の關係から見れば、氣の毒な事である併し、誰葬るとなく、現在の所全く葬られて居る形である。臼井哲夫氏は、是と異つて圖々しく殺しても死なぬと見える方であつたが、それでも、川獄後あまり表立つて顔出しせぬ。もつと顔出し爲相なものと思はるゝにさうで無い。彼の如く圖太くして、猶ほそれであるとすれば、他は略ぼ推察に餘りある。牢から出たとて、寄つてたかつて、社會から葬るにも及ぶまい。中には反對に、引き立てゝ然るべきのがある。

古賀廉造氏は、被告となつて初めて裁判所の恐ろしいを知つたと云ふ事であるが、監獄に入るものと、傍で想像するよりも、氣落ちするのがある。相應に

働き得る身を以て、何か人が卑しめる様な気がするだけで、働けなくなつたりする。人物經濟の上でも損である。法網に觸れたとて、さう何所までも追窮するは酷に失する。

實は獄に入るのは、犯罪隊が戦場で彈丸に當るやうなものである。誰に當り誰が免るゝか知れぬ。大抵小數の死傷であつて、多數は免れ、大きな顔して凱旋する。

印象

坊主が憎ければ袈裟まで憎いで、罪人と見ると、何處までもそれを罪人扱ひにして居るのは、喜ぶべきことではない。

一三 紳士は文明の産物

紳士とは何であるかと問ひ詰めれば、随分むづかしくなるが、普通に言うた

これは「紳士の蠶的分子」

の一節である。

り聞いたりする處では略ぼ極まつて居る。言ふ事は出来なくても分つた気がする。ゼントルメンはゼントル、メンであるといふのは、一種の洒落であつて語源から言ふのでなく語源は別にあるけれど、ゼントルと言へば如何にもさらさらしく思はれる。物事に角が立たず、温良恭謙讓、如何にもツキが良さうである。風采も心の持方も人の氣持を害する事が無く、如何にも品がよいと思はせる。是れ確かに文明の産物である。

けれども、文明は、既に窮まつたので無く、社會は猶ほ永遠に進まねばならぬ。今から昔時を顧みて開けぬやうに思ふと同じく、後世から現今を見れば開けぬのである。現今も必ず何れだけか野蠻である。如何なる紳士も多少蠶的分子を免れぬ。但其の蠶的分子が善いか悪いかと疑問である。

蠶的分子に善いのと悪いのとある。一寸文明と野蠻と言へば、凡て蠶的分子

が悪く聞えるが、文明に進むがために善い事を捨てた所少くない。多大の代價を拂つて来て居るのである。

住昔、住居の空氣が新鮮であつたが、今は煤煙で汚れて居り、甚しいのは、煤煙で咫尺を辨ぜぬに至る。機械の進歩の結果として致し方無いにしても、兎も角も空氣の新鮮を失つて居る。可なり高價である。此の類の事は何事にも免れぬ。

善い事が多いので文明を選ぶものゝ、善い事に悪い事も伴つて居る。六分善く四分悪ければ、六分の爲めに四分を捨てねばならぬ事がある。唯善い事ならば成るだけ失はぬに越した事は無い。代價を拂はねばならぬにて無暗と高價く拂ふにも及ばぬ。

何時でも文明に幾分の野蠻の件つて居り、未だ大いに進まぬ現代では、蠻的

分子は却々多い。紳士に蠻的分子があつたとて怪しむに足らぬ。悪い方を抑へ善い方を奨励すべきである。

容貌の紳士風になるのは善い事であつて、出来るならば何處までも紳士風にす可きであるが、心が之を伴つて居らねば、外紳士内野蠻である。立派な着物を着、立派な家に住んで居つても、己れ一人贅澤して人を人とも思はぬのは、蠻民が文明の装ひして居るばかりである。其甚しいのは、餘り見當らないけれど、一通り扮装を整ひ、新聞に書けば一個の紳士と言ふ所で、汽車に乗つて靴や毛布で幅を取り、人の立つて居るのを知らぬ顔して居つたりするのである。電車でも幅を取つて居るのがある、或は横坐りして居る、或は痰を板の上に吐いたりする。田舎者とか職人とかは、斯くあつても不思議もないが、時計の金鎖を光らかしたりして、斯くしては聊かあさましく感ぜられる。

古今東西の倫理説を並べて説いたりしながら、親戚友人の不幸に耳を傾けず全く知らん顔なごして居るのも知識を文明にして心を野蠻にするのである。工場に最新式の機械を備へ、外出するに最新式の自動車を用ゐ、最新式の方法を以て事務を敏活にしながら、職工の苦しみも知らず、妾を取つ替へ引つ替へして、家内の騒ぎを何でもない事に心得て居るのも文明に似て野蠻である。門構へから家屋の構造まで、何處の紳士にも劣らぬやうなのがいろ／＼あるが、其の内部が何程是れに相應して居るかは言ひ難い。文明風の裏面に必ず野蠻風ありと断定して差支へない、虫も殺さぬ顔をして居つて、裏面に案外慘酷なのがある。凡て慘酷は野蠻である。見たところ英國の模範的紳士であつて、心に立ち入れば南洋の土蠻より悪いのは幾らもある。

印象 緋猴が冠りしたところで、矢張り緋猴は緋猴だ、紳士も心からの紳

士でなくては駄目だ。

一四 喧嘩は人の本能より出つ

戀は思案の外といふが、喧嘩も思案の外である。二者全く關係ないやうで必ずしもさうでない。共に人の本能より出で、その結果から考へれば、戀は種族の繼續の爲めにし、喧嘩は自身の保護の爲めにする。凡て生きとし生きて居るもので、喧嘩する本能の無いのはない。生れながらの事であつて、誰にも教へられるのではない。赤ん坊が一人立ちする頃、もう喧嘩を始める。七つ八つのおなにくの頃頻に喧嘩する。もつと年が長じても喧嘩する。大人になつても喧嘩は止まぬ。唯段々分別がつくと共に、狼に喧嘩せず、喧嘩しても口で言ひ争ひ、容易に腕を振り上げたりせぬ。打ち合つたり、叩き合つたり、武者ぶり附

これは「喧嘩と戦争」の一節である。

いたりするのは、如何にも見にくい事に思はれる。その見にくいのは、打ち合はなくても事が済み、打ち合ふだけ自分も損し、人にも迷惑をかけると思ゆるところから来て居る。

利益の勘定高い所では喧嘩は少ない。上方贅六は喧嘩しても、間が抜けて居り、江戸つ子は喧嘩早く、二言目に拳固を出すといふのもそれである。京阪地方は久しく商業に慣れ、腕まくりしても、損こそあれ別段に得の行かぬ事を知つて居り、江戸では大名や旗本が集まり、職人は何處へ轉び込んでも其の日を暮すことが出氣、後前を考へなくてもよかつたからである。

今は以前と違ひ、東京に餘り喧嘩を見ぬのは、巡查が立番して居るばかりでなく、喧嘩しても何の儲けにならず、たゞ暇潰しに過ぎぬと知つたのである。今でも大道を酔つ拂つて兩腕を擴げ、喧嘩なら持つて來いと叫いて歩くのもあ

るが、誰れも相手にならず、下らぬ男として見過すことになつて居る。今は學校でも減多に打ち合ひの喧嘩はない。何でも利益を打算しては喧嘩なぞ出来るものではない、喧嘩といふ字が二字共に、口扁になつて居るのも口で争ふ事になつたのである。支那人は勘定高いので口で争ひ、猥に腕を振り上げたりせぬ拳固を振り上げるのは無分別の者のする事であつて、分別しては腕づくの喧嘩なぞ出来るものではないが、分別の出来ぬ場合もある。

物事は一から十まで道理で押し切る譯に行かず、議論ならば、謂はゆる水掛論に終る事が少くない。議論を闘はさなくても、初めから議論にならぬ事に分るのもある。都會では人が勘定高くなつて居つて、腕を振り上げるのを大人氣ないとするが、それでも相當の身分あるもので、下男を打擲したりするのがある。周囲の人が顔をしかめたりするので、叩き合つたりせぬが、周囲で當り

前の事に思ふやうでは、打合が絶えぬ有様である。九州あたりでは随分喧嘩が多い。何礦會社の社長とか頭取とかいふものが、宴會の席で叩き合ふのは珍らしくない。人が喧嘩に慣れて居つて、ソラ始まつたと見れば直ぐと膳を側へよせ喧嘩を見て居る。喧嘩といふても何といふ程の原因がなく、一杯機嫌で氣が立つて打合ふさいふ位で一應打ち合へば笑つて飲み直すといふ調子である。併し中には平素の恨を晴らさうとして、血の出る程な喧嘩をするのもある。何づれにしても、九州邊には喧嘩が多い。

今こそ商業が盛んになり、人一倍儲けに熱心な者もあるが、江戸の繁華より遠ざかつただけ、武骨なものが多く、儲けより腕自慢の事とする習慣が多かつたのである。

印象 實際今日喧嘩の少なくなつたのは、意氣地がなくなつた所爲もあら

うが、先づ勘定高くなつたことが因をなして居るのだ。

一五 勳功は授爵の標準にあらず

現在の有爵者が如何なる功績があつたかと思れば、他にこれと同等以上の功績ある者の多いのを認めずに居れぬ。宮相であつた田中伯だの、渡邊伯だの國家に功績あつたらうが、それだけの功績であるか、之を標準とすれば、男爵なんか幾千人と數へ切れぬ程成るべきでないか。

實際現在の有爵者の功績を標準とすれば、多くの新華族を作らねばならぬのであり、お上の思召も之を作りたくないのだから、作るに困難な事情があると云ふのは外では無い、有爵者は皆世襲であり、一度授爵されれば子々孫々華族である。現に舊華族を合せて千ばかりあるが、現在の有爵者を標準として

これは「授爵」の一節である。

之これ功績かうせきの同等どうとう以上いじやうなのに授爵じゆしやくをされるとすれば、年々ねんねん華族くわしやくが殖殖えて、到いたる所ところに華族くわしやくの肩書かたがきあるものを見る事ことになる。斯かくては華族くわしやくの値ちひが低ひくくなり、有あつても無なくても同じおなじであると云いふので、現げん在ざいの有爵者いうしやくしやと功績かうせきの同等どうとう以上いじやうなものがあつても、授爵じゆしやくするわけに行ゆかぬのである。

豊年ほうねんで米こめが安やすくなつて困こると米價調節べいかてうせつが案出あんしゅつされたと同じく、華族くわしやくに成なり手てが多いとて勳功調節くんかうてうせつが必要ひつぎやうになつた。現げん在ざいの有爵者いうしやくしやほごの有功者いうかうしやが無ないので無なく、之これに授爵じゆしやくすると爵しやくが多おほきに過すぎ價ちひが下さがると云いふのである。

然しかし實際じつさい同等どうとう以上いじやうの有功者いうかうしやがあつて、之これを其その儘ままにして置おくのは、如何いかなものであるか。現げん在ざいの有功者いうかうしやは先取さきとり權けんで勳功くんかうを占しめ、他人たにんをして與あづからしめぬと云いふ事ことになりはせぬか。

そこで問題もんたいになるのは、華族くわしやくの世襲せしゆである。或人あるひとに一度ひと華族くわしやくになれば、子々しや

孫々そんそん華族くわしやくであり、他たの人ひとは同等どうとう以上いじやうの勳功くんかうあつても華族くわしやくが多過おほぎるので何時いつ迄までも平民へいみんで居ゐり、公平こうへいを缺かく事餘ことあまりに甚はなだしいやうな結果けつこになる。勳功くんかうで華族くわしやくになる者ものは子々しや孫々そんそん迄まで至いたる程ほどの勳功くんかうと言いひ得たべきであるか。一人ひとりの勳功くんかうで十代じゅうだい續つづくとすれば、其その勳功くんかうを十無勳じゆむくんの者ものが分わつので十代じゅうだい分ぶんの一いちになる。百代ひゃくだい續つづけば百分ひゃくぶんの一いちになる。如何いかなる勳功くんかうも百分ひゃくぶんしては、言いふに足たらぬ程ほどに小ちひさくなりませぬか。何程なんばいの勳功くんかうでも無む限げんに世襲せしゆとするのは勘定かんぢやうに合あひ難たくなる。

爵しやくが世襲せしゆなるならば、位階ゐかひを世襲せしゆにしても、勳等くんとうを世襲せしゆにしても差支さしつかへない筈はずである。位階ゐかひ勳等くんとうを世襲せしゆにしてならぬとならば、爵しやくも何等なんらうかの制限せいげんなくてはならぬ。五攝家ごせつけとか、或ある特別とくべつなのを除のき、幾代いくだいかを経て、漸次ぜんじ下したへ下さがりて公こうは侯こうとなり、侯こうは伯はくとなし、伯はくは子しとなり子しは男だんとなり、男だんは無爵むしやくとなるやうにして、子孫しそんに勳功くんかうがあれば爵しやくを上げ、又は同爵どうしやくで幽代ゆうだいか續つづく事ことにし、何なん

しても、先祖が何れだけの勳功あつたがため、愚物でも馬の骨でも、何時迄も華族であり得る云ふ事を改めねばならぬ。

一度華族になれば、永代華族の位地を占め新たに華族を作るに妨がある云ふ事になつては、新陳代謝の杜絶する事になる。停滞が起る、腐敗が起る、溜飲が起る、或は其反動として、華族廢止が是認せらるゝ事にならぬとはせぬ。永代華族とか、幾代を限つての華族とか、一代華族とか、種々差別するのも宜からう。一代華族は何にもならぬと言ふものもあるが、現に位階勳等や、随分人の欲しがらるもので無いか。叙位叙爵よりも、一代丈勳の肩書を好いとする者ありはせぬか。

叙位叙勳は數に制限はない、何人でも出来る。現に何萬人あるか、數へられぬ程である。爵も一代だけにすれば數の多くなつて困ると云ふ心配は無い。現

在の有爵者を標準とし、之と同等以上の勳功ある者に対し、フシ／＼爵を授けられて宜いのである。さういふ爵を貰ひ受けるのは、滑稽である、大人氣ないと云ふたりしやうが、元來肩書は大人びたものでない。胸に金光りした色のついた物を下げたりするのは、生真面目に考へれば聊か變な事である。然し、子供らしい所あるものも社會に必要である。皆が皆悟りを開き、彼もつまらぬ、此もつまらぬと云ふ調子では、淡泊り過ぎて水ばかり飲んで居るやうである。時々お祭騒ぎして提灯行列するも宜い。衣冠束帯するのも宜い。矢大臣とするも宜い。一代華族となり、芝居の殿様を氣取る、強ち悪い事ではない。

印象 斯う華族様が殖えて來ては困る、實際一代華族が出來ぬのなら、遞減法はごうだらうか。

これは「一家内の事」の節である。

一六 家を治めんか國を治めんか

一家の事はどうでもよい、志し國家にあるといふものもあれば、一家を治めることが出来なくて、どうして一國を治めるかといふものがある。處で治國平天下を志し大宰相として立たうと思ふ者も、家の事情のために惱まされ、何とも致し方なくなる事もある。目に砂利が這入つても歩くことが出来なくなるやうに、家内に面白くない事があつて、物事が手につかなくなつたりする。が、家が治れば出で、何でも出来るか云へば、もとよりさうでない。家の治るのは一の問題らしくない。何の何兵衛、何の何左衛門、何れもよく家が治まつて居るけれど、それで公共事業に興る事が出来るかどうか疑はしい。多くは一家を治めても一國を治めるなど思ひもよらぬのである。

家内の事は、家内の當人にとつて重大であつても、家外と何の關係がない。家内の事からして、直に國家社會の事に考へ及ぶのは間違つて居る。一家の事から一足飛びに一國の事を考ふべきではない。國家とどうあらうと、社會とどうあらうと、家内の當人だけに家内の事の重大であり、少なくとも重大に感ぜられるは、疑ひを容れぬ。内に閉ぢ籠つて居るにしても、外に出で、活動するにしても、家内に事のないのが結構である。家内安全と云ひ、ホームの幸福といふは一般に望む所である。マイホームと云ふは、或は最後の慰安を求むる場所になつて居るが、家内安全は何でもない様な事であつて、何でもある事は稀でない。僅かな人數で組立て、居る家にナカ／＼面倒のある事がある。ホーム、ホーム、マイホーム云ひ、幸福を求めて得られず、何處へ行つても心配相にいま／＼し相に、涙ぐんで居るのがある。大多數の人は苦樂が家内の事から出

て居る。家内が面白いと面白からぬとが大に與つて居る。

二六

もと、どうして斯く別れるかと云ふに、殆ど廻り合せといふべき事が多い。己自らの身體さへ思ふに任せぬ事がある。誰でも病氣に罹りたくないのであるが、病氣に罹つたりする。胃が悪くなつたり、肺が悪くなつたり、瘡が出来たりする。誰でも好い子供を持たうとしてもさうはいかぬ。堯舜の子は愚であつたとは一の諺になつて居る。況して他人が這入つて来て、妻となり、母となつては尙更である。幸福になる事もあり、幸福にならぬ事もある。誰の家が幸福であり、誰の家が幸福でないか、豫め定め難い。

縁は異なるもとは、昔に夫婦の關係のみでない。親子兄弟の間、親戚の間様々である。而して斯く様々であるのは大體に於て悪い事ではなく、種族の保存よりしても、社會の進歩よりしても缺くべからざる事である。其物が雌雄に分れた

のも、人類が血族結婚を避けて、異族結婚を求めたのも、單調を破り、種々の境遇に順應し得やうとするのである。

或る一族に限つて居れば、其の一族に禍がある場合、それで消滅してしまふが、他の異なる族と共に居れば、異なる族によつて、維持して行かれる。同族結婚の行はれた事もあるが、今は異族結婚が普通になつて居る。異族が夫婦となつて、一つの家に居り、其の親族が互に相對して居れば、事が、それだけ複雑になる譯である。複雑はよく行けば幸福を増し、悪く行けば不幸を生ずる。多數は甚だしく、幸福を感じず、又甚だしく不幸を感じぬ。大抵に暮して行き、面白をかしく、笑ひもし、時として言ひ合ひしたりする。

或る少數は、直に圓滿なる家庭を作り、極樂園に近い有様であり、或る少數は、次ぎから次ぎに、面倒ばかりで苦められて居る。何の階級が、其の何れに

當ると限らぬ。裏屋住居で實に愉快に暮らして居るのがあるかと思れば、其隣に朝から晩まで喧嘩して居るのがある。大厦高樓で愉快に過して居るのがあるかと思れば、其の親族で一層大きな家を構へ、而して家内の人が、互に睨み合ひ、苦虫かみつぶしたやうな顔をし、或は片隅ですゝり泣きが聞こえたりする。誠に種々様々であるが、面倒の起りは原因が一でないにしても、何か順序の宜しきを得ぬ所から來て居る。

印象

一家の事はやはり丸く治めて置かぬのは嘘だ。一家にこたぐゝがあり、それに頭腦を痛めて居るやうでは、外に在つて活動は出來まい。

一七 便利は必要と同じ

これは「安價生活」發澤生

衣服も暑寒さを凌ぐばかりで無く、重い物は好ましくなく、肌觸りの悪いも

活の「一節」である。

のは好ましくない。寒さには暖かくて軽いものを選ぶ。家屋を寢宿りだけで済ます事は出來ず、立つたり坐つたり、遊んだり、働いたりするのに便利のよいやうにしたくなる。便利に馴れて便利を覺えず、實に何とか便利にしたくなる。

唯、食ひさへすれば宜い、着さへすれば宜い、住みさへすれば宜いといふのが、善い者を喰ひ、善い着物を着、善い家に住みたいといふ事になり、いろいろと工夫を廻らす。而して是れ皆何程か必要と異ならぬ。必要として求める程に求めるのも怪むに足らぬ。唯だ出來る出來ぬに境があり、出來ればそれまでの事である。

所が、出來る上に猶ほ餘裕があるとなつては、更にそれ以上を求めやうとする。食も衣も住も、もつと善くしやうとする。が、或る時代に於て爲し得る所

に限りがある。如何に品物を善くしやうとしたとて、善くしやうが無くなる。そこで、何か普通と變つた事にして満足しやうとする。食物も料理法は略きまつて居る。味噌汁なり、刺身なり、口取なり、吟味したとて大抵知れたものである。極りきつては面白くないといふので、何か變つたものを求め、何處何處の名産といふやうなものを集める。或は鯛の頬肉のみを食べる。或は茄子の枝になつて居るのを糠漬にする八百善料理といふのも眞の味よりは何か少し變つた事をするのである。西洋料理でも其の通りで、味よりも何か變つた事を爲さうとする。百年を経た葡萄酒とて味は別段に美しいのではない。葡萄酒とて期限がある。餘り久しくなれば不味くなる。けれど、沈没した大船から出た葡萄酒だとして舌鼓打つて止まぬ。味よりも珍物を求めるのである。

衣服の流行は紋が大きいと小さいとか、洋服の上着が長いとか短いとか、何うでも宜いやうな事で、却て大切な事になつて居るが、是れ位の流行を追ふだけの事は、稍や餘裕あるものにとつて何でも無い。帽子の形は毎年變る。或は同じ年に變る、端の曲り方が違つたりする。然し、それを悉く取り替へたとて何程の事でない。何か普通に出来たやうな事を考へて、寶石を競ふ。或る人の指輪に五千圓であるから、自分は一萬圓のにしやうとか、ダイヤモンドも有りふれて居るからラチウムにしやうとか思ひ立つ。衣服と全く關係がない。家屋も普通の座敷で飽いたとして、何か變つたものを作らうとする。大層高樓、何處にそういふ室があるか知れぬやうなものを築き、それでも足らぬとして何か變つた建築が無いかと相談したりする。金が有り餘つても建築法に限りがあり、唯だ金目のかゝるやうな事をせねば氣が済まぬ。食でも無く、衣でも無く、住でも無く、金目のかゝる事にしやうとし、全く贅澤物になる。

必要は充たさねばならず、又成る可く精良にするに越した事は無いが、贅澤となつては、食衣住の範圍を脱してしまふ。食衣住の範圍は脱してしまふが、そこで進歩を促すの效能が無いかと疑問になるが、それは效能のある事がある。いろ／＼と考へた揚句に面白い案の出る事もある。或は案外簡単な面白い案が出る。今日何處にでもあるサンドキツチは、サンドキツチといふ華族が放蕩で奢り散らし、酔醒時分に何か食物をこ尋ね、パンにハムを合せて食うたのが美味かつたと云ふので、廣く世間に弘まり、調法な食べ方になつた。

家屋に至つてはいろ／＼と工夫を凝し得る丈け贅澤するものが出ると共に、進歩する事少くない。家屋は己れ自らのために最も贅澤になし得るものであるが、考へれば、其の數寄を凝らした所に住居するのは久しいものでない。大抵中年か老年になつて造り初めるので、二三十年も住めば頂上である。子孫は

其處に長く住居すると限らぬ。大抵普請が出来て幾程も無く死に、子の代に之を賣り拂つて他に引き移る事になる。十代と續くのは有るか無いかである。

印象 喉元すぐればあつさを忘れたがるもので、兎角く贅澤な生活に、流れ易い。心すべきことではあるまいか。

一八 男女間は競争最も少なし

これは「男女
競争」の一節
である。

男と女と兩性に別れたのは、生命の保護及びその繼續に最も利益あるやうになつたのであつて、相争ふのは何か特別の事情に由來する。

同業の仲で争ふても、分業となつては争ふの必要がなく、争ふのは何處ぞに間違つたところがあるからである。夫婦の間は琴瑟相和すると云ふが、夫婦の間ばかりでなく社會を通じて皆同じ關係になつて居る。競争があつても、男女の

間ほど少いのは無いと言へる。

男が女の領分を冒すとか、女が男の領分を冒すとか言ふのは、冒すのでなくして補充するのである。歐洲大戦亂で、男といふ男は成る可く戰場に出る事になつて居り、國內で男の手が足らぬ、そこで女が電車自動車の運轉手になつたりする。平常は女が運轉手にならなくても可く、又爲らうともせぬのであつて男の手が足らぬところで女が男の事をするのである。女は普通に、裁縫する事になつて居るが、女の手で間に合はぬとすれば、男が裁縫する。裁縫が忙しくなつて仕立屋といふ職業も出来て来る。料理でもさうである。看護婦は女であるが、戦争には女で間に合はぬので看護卒が入用になる。

學校の教員は、殆ど悉く男であつたのに、次第に女が加はり、現にキューリー夫人の如く、女で大學教授になつて居るのがある。小學校に女教員が無く

てならぬ事になつて居る。之と言ふのも、學校の數が増加し、男の手で引き足りぬ所が興つて居る。女醫師が出来、女辯護士が出来るのも之と同じい。

社會が進歩すれば事業が多くなり、事業が多くなれば、益々人手を要する事になり、従来男ばかりでしたことが、女をも交へるやうになり、女ばかりでした事が、男をも交へる事になる。前には大ざつばであつて男だけで済み、女だけで済んだが、複雑になつて緻密に考へ、同じ事でも男の手を要するのと、女の手を要するのとあると言ふ事が分つたりする。男で教員になり手が多にしても女子教育に多少の女教員を交へねば物足らなく感ぜられる。

事業が多くなつたので、女のすべき事まで男がするやうに、男は別に事業を求めろ方が適當であるさせられる。

社會が衰退しては、事業が減じ、就職に苦しむやうになるが、隆盛に向へば

事業が多く、就職に苦しむやうな事はなく、苦しむのは何か事情あつての事である。

職業の上で男女相競争するといふは、特別の例に屬する。男として意氣地なく、女として遣り過ぎである。變つた事しなくても、愉快に生活する事は出来る。

男が男らしくして居る限り、女が女らしくして居る限り、相互の間に争ひの起るべきでない。相争ふのは男らしからぬ男、女らしからぬ女との事である。

男女の區別は明白を缺き、女らしい男があり、男らしい女があるが、畢竟男は男だけの事があり、女は女だけの事があつて、自分の領分で安んずる事が出来る。他の領分を侵さなくても可い、他の手の足らぬところを援助すべきであつて、殊更領分を侵すべきで無い。侵すと見えるのは事の整はぬ間の事で幾何

もなく折合が着いて平穩無事になる。

男が女を壓迫して何の愉快があるか。女がいかに反抗して何の愉快があるか。愉快と思ふ者は、多數中の除外例とすべきである。

何時でも何か變つた事があり、年々暑さ寒さの違ひがある。或は雨が多かつたり少なかつたりする。時として彗星が出でたり、地震で家が潰れたりする。

男女の關係は普通の最も普通なるものであつても、常に少しの變が無いといふ程でよい。時として可なりの騒ぎが起る事もあるけれども、大體に於て極つて居る。何も狼狽て騒ぐにも及ばぬ。

最も美はしいのは男女の關係である。男ばかりで殺風景に過ぎ、女ばかりで所謂女の字を三つ書いて姦しいといふ事になり、之をして各々程を得せしむるのは、二者相錯綜する所にある。男で女と争ふのは愚物であり、女で男と争ふ

のは氣の利かぬにも程がある。従つて男女鬭争など有り得べきでなく、其の鬭争するやうな社會は病的であると言はねばならぬ。

印象

男女は互に相頼り相扶け合ふべきものであつて、睨み合ふべきものではない。

一九 出しや張りミ引つ込思案

「出しや張る女」といふ題が與へられたが、「出しや張る」といふ語は餘りよく聞えぬ。いかにも出しや張るのは褒めたものでなく、女ならば尙更である。出しや張るとか、出過ぎるとか、さしでるとか、出なくてもよい所に出るのであつて傍から見ても異様に感ずるを免かれぬ。先づ出しや張るのは厭がられるのであるけれども程度上の事で何處から出しや張る、何處から出しや張らぬと極め

これは「出しや張る女」の一節である。

にくい。出しや張るの反對に引つ込み思案がある、はにかみがある、因循がある、愚圖がある。引つ込み思案の甚しいのから見れば、普通に當り前の事と思ふところでも出しや張りのやうに見え、よせばよいにと思はれる。女は引つ込んで、おとなしくして居らねばならぬことを考へる者は、大抵のことを出しや張るとし、餘計なことをする。或一部分で出しや張るとすると他の一部分で引つ込み過ぎると思ふのがある。大體は社會の狀態である。

女は男に較べて靜かにし、淑かにして居るが、必要に應じて相應に飛び出し男優りといふことになる。戰爭騒ぎの多い頃には、巴御前の如く甲冑を着てる上に薙刀を揮ひ、男も刃向かふことの出来ぬが出る。徳川幕府の成立する頃春日局のやうなのがある。己れの家庭を捨て、將軍のためにいろ／＼と畫策した。良妻賢母から忠臣に變じ、寧ろ政治家になつたのである。學問の盛んな

時女學者が出て、繪畫の盛んな時女畫師が出て、芝居の盛んな時女役者が出る。今は義太夫が盛んで呂昇のやうなのが出で、碁が盛んで喜多氏の妻のやうなのが出る。これ等は別れて居つて別段何とも思はれぬが、普通の女の爲さぬ事を爲して居り、出しや張りと言へば言へる。似た悪い意義に解せられる。女學校が出来、女教員が養成された時、始はいろ／＼と言はれ、往來を通れば後からエヘンと咳拂ひされた。けれども今は當り前のことに思はれる。勢ひの熱せぬ時に出るか、又勢ひに取り残されたりするかすれば、異様に感ぜられる。

女が選舉運動に關係するのは事が新しいのと其類の事の少ないのとで異様に感ぜられるところがある。選舉にいろ／＼あつて、市會議員の選舉、府會議員の選舉とかなれば、左程の事もないけれど、衆議院議員の選舉となれば競争が激烈なだけ、時とし一家の浮沈に關し、嘗て相應の資産家であつたのが、何回

かの選舉で窮迫の状態に陥つたのが珍しくない。夫れほごまでに選舉を争はねばならぬかは疑問であつても、兎も角衆議院議員の選舉は容易でなく、當人の關係者が出来ただけ應援するのは已むを得ぬ次第で、延いて夫の大事に、妻女たる者が運動に加はるといふこともある。そこで選舉に女が加はるとなると女の癖にあられもないと思はれたりするが、然し畢竟するに、女の關係するのは效能があるか無いかといふに歸する。眞に效能あれば、一家の状態として運動に關するのは、寧ろ賞すべきであつて、何の非難すべきことがない。

之に反して別段功能もなく、却て妨害となるとあつては要らざる仕業といはねばならぬ。妻女が選舉運動に關係するのは、有益か無益か是れ人と事情とで極まるところで、一樣に云ふことは出来ぬ。何しても有益とあれば、關係するがよ、出しや張ると思はれたとて仕方がない。多少の非難は何事にも付き纏

ふ。非難を冒して當選を確實にするに越したことはない。

印象 この頃出しや張る女が、急に殖え出して来たやうだが、これは大に考ふべきことであらう。

四 想 痕

歳 時

一 老か壯か舊か新か

「新なるは常に好まる、舊なるの却て良きの屢々なれと」(ニット、エル、アルチド、キエルト、ガムメルト、エル、スツンドム、ベドレ)とは北歐の諺にして、何處にも事實に現る。守舊の名ある支那人さへ人心隨歲改、世事逐時新といふ。實に新浴者振ニ其衣、新沐者彈ニ其冠、人之情也(荀子)とあるが如く、新なるを好むは人の情なり。

人の情にして、又人に缺くべからず。新陳代謝は生命の繋がる所、其停滞す

想 痕

これは「一月」の一節である。

るは即ち衰頹を意味す。青年の意氣旺盛、新に就き奇を求むるは、自ら進み、併せて他を進むるもの、其の猪突して顧みざるは寧ろ賞讃するに足る。

而も好む所必ずしも良からず、好悪は判断なりとするも自ら種類あり、普通に好む所は一時の感想よりし、遠からず好まざる所となる者少からず。間斷なく新分子の注入を要するも、新分子は一樣ならず、新たなるの一標準を以て其の良否を決するを得ず。新舊の良きを探るをば老練と謂ふ。

且壯時希望の盈ち、事として成し得ざる無しと考ふるも、後何事をか成すは幾人なりとする。春秋に富むは一種の資産にして、以て事を成し得べきに似たれど、事は時のみにて成らず、力を發揮せず、能を發揮せずんば時は空しく過ぐ、數十年も數月の如し。

少壯の怠るは老年の勉むるに劣る。雨森芳洲八十一にして古今集を論ずるに

一千題自ら賦する一千首、カート八十にして希臘を學び、ブルタク同年にして羅甸を學びぬ。チヨーサーの傑作は五十四に始まりて六十一に終り、モルトケの埃國を攻めしは六十七、佛國を攻めしは七十一、ヂ、アン及びフリーバーは百才まで畫筆を離さざりき。

少壯は最も有望なるも、徒らに齡を待むべきに非ず。老年は前路幾もなければ、尙ほ爲すこと有るに堪ふ。新年に臨み、一を戒め、一を勵ます。

印象 今年こそは、今年こそはと心に思ひながら遂に何事も爲さずして世を送る者が多い。心すべきことではあるまいか。

二 勤勉と餘裕

十二月より一月に移るは、猶ほ十一月より十二月に移り來れると異なる無き

これ「一月」の一節である。

も、歳の茲に新たなるや、舊年を回顧して、略々如何に變化し展開し進歩したるかを觀察するを得べし。而して歳の更まること幾回し、年々歳々舊を送り新を迎ふる間に在りて、何の變化を致し、やの容易に知覺し能はざる所とせんか。世紀の改まるに際し、舊世紀を一括して瞥見せば、其の變化の跡、髣髴として眼前に現はれ来る。今や十九世紀正に去り、二十世紀新に到るに會す。乃ち新年に臨みて舊年を顧み、新世紀の首端に立ちて前世紀一百年間の事を懐へば、其の表現せるの最も彰著なるは、個人の益々勤勉に赴けること是なり。之を十八世紀に比する、十九世紀中の人々は實に勤勉の稱に價すと謂ふべく、是より先き、官位無き人々を奴隸視して酷役虐使する風の一般に存し、遊食の輩は眞に徒爾にして日を消し時に狩獵に出づるの外は、殆ど終歲何の爲す事なきを以て通態とせり。今は遊食の名を冠せらるゝ者と雖も、必ず何事をか爲しつゝあ

り。茫然として唯眠食に耽るは、洵に人なるの本分を盡くさざるかの如くに考へらる。我が國情に着るも、幕府時代に較ぶれば、近年は總じて業務に勉強する形あり、曩に旗下八萬と稱せしは遊食の徒にして、其外にも悠遊眠食せる者太だ衆かりき。今も猶ほ遊食の徒あるにせよ其の數や大に減じ、隱居の身分さへ少しく怪まる。明治に入りても、初め政府に仕官せる者は、概ね用少く間多く一定の時間に出省し、一定の事務室に參集し、簿冊を點檢し、整理し、茶を飲み煙を喫し、而して一定の時間に退廳す。是れ所謂日々の勤務なり。大學より出で、官に仕る者は嘗て斯かる習慣に通ぜざりしが故に、出省して、用務を命ぜらるゝ、直に之を果し、然る後何の爲す所も無く、惘然として天井を眺めて時を過す。同僚の其の人に對して教示するあり、曰く、事務は爾かく迅速に済了すべからず、出仕の時間中に済了し能ふ如くにして辨ぜよと。當時事務に

慣るゝに慣ざるとの相違は則ち此に在り。事務無くして而も事務あるかの如くに装ふ者、尤も事務に慣るゝと爲せり。十八年の暮、官制改革ありてより、大に各省の事務を督勵し且勉めて繁文縟禮を除き、更に執務時間を増しぬ。此等の事久しからずして一旦廢せられんこそしが、漸くにして次第に勤勉に復し、今は猶ほ充分ならずといへ、前年に比すれば大に勤勉の風を加へ來れりとす。而して獨り官省のみならず、一般の會社製造場皆然り。察するに今日以後愈然ることならん。

然れども大に勤勉なるの風を養ふ事共に、又成るべく餘裕を作るに力めざるべからず、世上の事如何に進歩を極むるありとも、唯其の機械的なるは、餘りに殺風景に過ぐ、林立せる煙突の暗黒なる煤烟の間に映するのみにて、他に一物の眼を悦ばす無からんには、人の生存する所以の那邊にあるや知り難きに至らん。

らん。又必ず美的の眺望無かるべからず、樹木の生せざる禿山、船楫の通ぜざる細流は少しの益無くして徒らに交通の妨礙たるに過ぎざれど、煙突と煤烟との外一物の目に映する無きよりは、禿山細流の點綴するあるを優れりとすべし。若くは煙りを隔て、青山碧水の眸に入るを以て、更に大に心に快しきすべし。人の生を享くる亦此れと似たる所あり、遑々忙々として終日些の間無く殆ど身の落着く所を知らざるは不可なり。斯の如きは守錢奴の黄白を蓄積し、鏘然然たるに接して愉快を覺ゆると擇ぶこと無し。須らく勤勉なると共に、爾かく職事に忙殺されざる丈の餘裕を作るべきを要す。世運益々隆昌に赴きて、市街の建築彌々密を加へ、汽車汽船の往來一層頻繁を致すに隨ひ、更に益々公園設置の必要を生じ、且名所保存の肝要を感じるに非ずや。一般に勤勉の風を養ひて勤勉其の者を愉快と感ずるの念を長ぜしむるは、間に努むべきの緊切事たる

るも、又同時に善く遊樂するの道を求むべし、一に勤勉を旨として多忙に苦しむが如きは、特に稱するを得ず、若し夫れ多忙を口にして自ら勤勉なるを誇るに至りては、固より云ふに足らざるなり。

印象 眞に勤勉家でありたい、そしていつでも仕事の上にも餘裕があつて欲しいものだと思ふ。

三 紀元節の意義を知れ

三六節中、元旦は古來の習慣、天長節は小兒も解する所、唯紀元節、幾分の疑ひを免れず。明治に入りて設定し、初め専ら皇祖を追憶せんとし、或は基督教紀元に對せんとし、或は米國獨立祭の如くせんとし、年月日にも異論を來し、今尙ほ一致せざるが、紀元の語よりしてか、建國の鴻業よりしてか、創業、新

これは「二月」
の中の一節で
ある。

設、維新、革新等を聯想し、此日は憲法を發布し、此日に金鵄勳章を創設し、民間にても此日を以て開業せる者少からず。されど、元旦に舊新を區別し、自ら新たにするに務むるに比し、紀元節は殆ど云ふに足らざるの狀態とす。

故さら案出せしならねど、元旦は世界の始めを祝し、紀元節は國家の始めを祝し、天長節は今上の始めを祝し、三大節皆始めを祝するが紀元節は國政に關し、苟も國政を念ふ者は此日を以て更新の如何を考ふべし。苟日新日新、又日新、朱註にも滌其舊染之汚而自新とあり。眇たる一身に日々垢の加はれば大なる國家に年々弊害の積むは自然の數、沐浴して垢を去るが如く、改修若くは改革して弊害を除くを要す。抑々建國とは何事ぞ、紛亂せる各部を統一し、之を秩序立て、内に業務を勵ましめ、外に寇敵を攘はしめざりしや。

劇しく動けば、汗の流れ、塵を被るが、靜かにするも身に垢塵なきを得ず。

變時に拔本塞源を敢てすべきは勿論、平時に弊習を改め、自ら新にするに務むべし。變時は弊害の卸賣、平時は弊害の小賣、小賣も積みて積弊を爲る。建國紀元は一回なれど、爾後新に除くべき者、新に設くべき者、曾て絶えず、今も其の多きに苦む。紀元節毎に、爲政家は願みて弊の改むべき無きやを察し、他の人々も關係事業に就て爾かすべし。積弊の極まれば、革命的變動あるのみ。但し新は眞なるべく、奇を意味せず。單に奇を追へば、新ならざるに劣らん。

印象 今日思想のぐらついて居る時、是非この紀元節の意義を知つて、邦家の爲めに盡して誓ひたい。

四 源は遠く水は清かれ

果して皇祖即位後二千五百七十五年なるか、史家に議論多く、幾分を減する

これも「二月」の一節である

の適當ならんも、古今と無く東西と無く、帝王の系統の最も久しき者なること少の疑ひを容れず。皇統の連綿たるは人毎に何等か理解せしむる中に、國家の獨立し、民族の結合し來りたるを表明す。君系の絶て獨立を保てる者、君系の續きて獨立を失へる者、或は獨逸の如く四分五裂せし後に國家として大に發展せる者、或は猶太の如く國家の消滅せし後に民族の四方に散り所在の金權を收むる者あるが、他に一切の事情を同くせば、何事も永續するに若くは無し。

流れの大なるには源の遠からんことを要す。長くして狭きもあれど、長くして狭きは、短くして狭きよりは、大、況んや多くの場合、長くして狭きは長さに比して狭く普通の狭きよりも遙に廣きに於ては河川に關し先づ長さの如何を問ふは、順序の當に然るべき所、たゞ流れの大なるは概ね漲り、舟を泛ぶるも眺望の樂しみを殺ぐこと多し。若し大にして清くんば、赤壁は宵に月夜に遊ぶべ

想 痕

きのみに非ず。日晝に水充蕩漾微瀾抽織、心曠く神怡ぶを覺えん。無心無情の川は下流の濁るを免れざらんが有心有情の群集の濁ると否とは一に意志にて決す。

我が日本の歴史は世々代々澄徹鏡の如くならず、斷えず何程かの汚濁加はり、或は發展と共に所謂清濁併せ飲むを必要とすれど、清めんとするも尙ほ濁るの常にして、豫め濁るを許さば汚濁を極むに終らん。國運の長久なるとも、公私混亂、政弊百出、官職が民を欺き之を虐ぐるの具と爲りては頗る惑はざるを得ず。望むらくは源は愈々遠く、水は愈々清かれ、根抵は愈々深く、上枝は愈々高かれ。水至清則無魚とは支那の諺、水清くして何ぞ魚なからんや。

印象 一たび皇祖の建業に思ひ到つたならば、とても國のために心を致さずには居られまい。

五 春

これは「三月」の中にある一節である。

四季さいふ語は頗る曖昧にして、熱帯地方殆ど四季の變なく、寒帯地方夏冬ありて春秋なし、唯温帯地方に之れ有るも、何時よりして春、何時よりして夏、何時よりして秋、何時よりして冬なるやは一定せず。或は經度に従つて異なり或は地勢に従つて同じからず。何れの國も其の能く判然確定したるは有らず。我國は舊と太陰曆を用ゐ、正月を以て春の初めと爲し、尋で太陽曆を用ゐしより、舊の正月は後ること一箇月若くは二箇月、爲めに春季の何の日よりするやは益々曖昧と爲れり。或る者は其の歳首よりするを謂ひ或る者は後ること約一箇月の時よりするを謂ひ、又或る者は其月の始めよりすと謂ひ、頗る錯雜するを免れず。一般には只漠然春心の感ぜらるゝ頃より春なりと爲し、

特に定まれる日あるを認めず。元四季の區別は重に農家に於て必要とせるもの大體の區別は既に世間に存するありしが、是れ皆經驗より得たる所を平均して定められたるなり。我が太陽曆の由つて來りし所の歐米諸國は經度略相同じく皆一樣に二三月を以て春季の初めと爲す。是れ太陽曆を用ゐる國を通じて習慣とせる所なれば、之に倣ひて、三月より春とするを便利とすべし。歐洲に在りては三月は春の初めなるのみならず、又實に歳の初めなりき。其の普く一月を以て歳の初めと爲せるは僅に十八世紀の中期以後に在り。ロングフェローは十二月をして各々云ふ所あらしめしが、其の三月の辭に曰ふ、吾はマルチユースなり。嘗て第一たりしも今や第三たり、歳を始むるは吾が職分たりしに、人間の一言にて之を變じ、更に兩面のヤーヌをして吾が舊位に居らしめぬ。故に吾は人間に對して戰を挑む。狂風吹々都市を搖蕩し、河を漲らし雨を降らし屋舎

を翻らし三月に至りて狂風の歌々たるは我國も亦然り。所謂花に嵐なるもの、雪の舞よりす。四月の辭に曰ふ大に春の門を開きて百花の爛漫たるを迎ふ。旂旗美麗、禽鳥歌唱し、陽光の和煦なる、人の心に宜しと。五月の辭に云ふ。白鷗鳴き、黃峰吟じ、吾が來るを報ず、是れ即ち吾が使なり。而して看よ、吾が名は山廬子の花に書せると。我國に在りて春光駘蕩、最も人心を暢快ならしむるは四月の候と爲す。五月に至れば、動もすれば梅雨の節に入り細雨霏々陰氣四方に塞がる。春の遊びを爲すは恰も人心の最も樂しき時に當る。四季孰つの節も皆其の序に應じて恰も樂を感じざる莫しとはいへ心氣最も舒暢、怡樂を感じる最も饒きは、即ち此の季節を以て第一と爲す。所謂春の野に遊ぶが如しとは、眞に心を快適せしむるの趣きあるを覺ゆ。而して此の往好の季節に際してや、郊外の漫步を以て、最も適せりと爲す。春の野に遊ぶ、則ち

軟風面を拂らひ、心氣爲めに暢快、樂しみ涯り無く、最も人心に適し、又最も身體に宜し。其の時に於てせずして猶ほ其の時の如くなる、それ唯修養あるものかな。

印象

春は心もおのづと長閑になる。これを読んで居るとまるで春風に吹かれて居るやうな氣がする。

六 遊ぶべき季節

花の季節は遊ぶべき季節、遊ぶべきに遊ぶは猶ほ勤むべきに勤むるが如し。勤勉の必要ならば遊樂も亦必要、遊樂を輕んずるは睡眠を輕んずるに同じ。睡眠を貪るは固より不可、眠たくば飽くまで眠れ棺の中、遊樂を貪る其弊や云はずして明けし。而も能く覺むる者は能く眠り能く勤むるものは能く遊ぶ、最も

勤勉なる者は最も遊樂す。現今英國第一の外科醫トリヴは最も勤勉なるを以て名あり。而して一年の三分一を都外の遊樂に費す。實に勤むる者は遊ぶべからず、一日に遊ぶべき時間あり、一年に遊ぶべき季節あり、遊ぶべき季節何ぞ遊ぶべからんや。而も花の季節は櫻花の爛漫たるのみに非ず。寒暖正に膚に適し、花なしと雖も尙ほ快とするに足る。花の人を快にするか、氣候の人を快にするか遽に決し易からず。嚴寒若くは酷暑、櫻花の咲くも人甚だ之を賞せじ。陽春四月、花なきも人必ず出遊せん、況んや山野を呈し、往くとして心魂の舒暢を覺えざる無し。花ある處遊ぶに宜しく、花なき處亦遊ぶに宜し。呼びて花の季節とする頃、唯當に遊ぶべし。遊びて然る後大に勤むるに堪ふ。以何に遊ぶべきかは、人皆知るが如し。而して動もすれば之を云ふに惑ふ。されど事や豈單純ならずや。遊樂と勤勉と相反對する者、若し遊ばん欲せば

平素從事する所の反對に出でんのみ。營々として室内に勤務せんか、須らく室外に遊ぶべし。室内に籠るの久しければ、室を離れ、家を離れ、市街を離れ、遠く郊野に遊ぶべし。骨牌は勿論、碁將棋、管絃、猶ほ之を避けよ。而も軍人の如く屋外に就業するの多きは室内の遊樂却て妙ならん。決して一に拘はるべからず。要は反對せる者を轉換して相救ふに在り。

印象 春は蓋し遊ぶの時季であらう。それにしても如何に遊ぶべきかを考ふべきではあるまいか。

七 福は心にあり

花の季に入り老若男女皆齊しく出でて遊ばんとす。遊ぶべきに遊ぶは事の然るべき者、今より大に遊ぶの望まし。されど花より園子といひ酒なくば何の已

これは「四月」の中にある一節である。

れが櫻かなといふ。園子若くは酒を念とせば花ありと雖も猶ほ花無きが如し。之を念とせざるも心に憫む所あれば、人の觀て樂しむ所も樂しからず。人の觀て悦ぶ所も悦ばしからず。爛漫たる花の下に獨り自ら詩々として過ぎ、動もすれば人の遊ぶのを見て憤懣に堪へず。花歡樂を促すべきも、歡樂は心に在り、花に在らず、心焉に在らざれば、視るも何の見る所ぞ。

豈に唯花のみならんや、一切の事物も亦此の如し心の樂しめば觀るとして樂しからざる無く、心の苦めば觀るものとして苦しからざる無し。心の樂しめるは幸ひ、心の苦しめるは不幸、心外物情に著大の差あるも、苦樂の上に何の差を及ぼさず。粗食して權褻を纏ふあり、美食して衣服に寶石を飾るあり。而も誰か二者に就て孰れが幸福なるを判断し得べき。貧にして苦しむあれば、又絶えて苦まさるあり。富みて樂むあれば又絶えて樂まさるあり。心に立ち入れ

想 痕

は往々意外なるあり。

シラグサ王ヒエロは詩人シモニデスに語りて曰へりき人間の多くは王位の莊嚴に欺かる。實に彼等は眼に見る所を以て人の幸不幸を判断す。而も吾は經驗して詳かに知る。王は最大悦樂の最小部分を得、最大禍災の最大部分を得と、ヒエロは後世傳ふるが如き賢王ならず、其の云へりし所も爲にする所ありての事ならんも、時として斯かるを疑ふべからず。最大といひ最小いふは過ぎたらんが、他より想ふほど樂しからざるべし。人の幸不幸は、表面を以つて知られず。

其の家を観れば高さ丈餘の石壁を繞らし、中に大廈あり、高樓あり、廣き園池あり。其の富を問へば巨萬に及ぶ。其主人たる者は欲するとして得ざる無きが如し。實に欲するとして得ざる無く、耳目の快を縦にすべき者一命を傳へ

て直ちに得べきも、唯だ一の必し難きあり。其果して心の安きを得るや否やは誠に難問題なりとす。綺羅を重ね、珍味を陳ぬるも、或るものゝ心を責むる無きか。夜靜にして人定まれば勿論晝間にも間斷なく心を惱まし、忘れんとして得ざるあらざるか。悲痛の状態は間々深窓に見る、深窓に聞く、固より物質上の満足を得て兼て心の満足を得たるにあり。人生の幸福を極むるに庶し。而も他に外觀と内實と齟齬せる者の頗る多きを認めざる能はず。例證は計ふるに堪へず。且つ之を公にするを忍びざる所に屬す。廣く世に知れ渡れる者にては、藤堂家の如きあり。華族中有福を以て稱せられ何の不足なき筈なれど、指して幸福とせんは未だし。而も是れ不慮の過失よりせるもの、或は懊惱の甚だしきに至らざらん。罪惡を犯せるは、到底此の比にあらず。貧は人の嫌ふ所、又嫌はざるべからず。世を擧りて貧に安じ、移ることを肯

ぜずんば、國は永く貧國なるを免れず。されど種々の事情よりして境遇を變ずる能はず正當の途を踏みて貧なる者、所謂オーネスト、ボヴァチーなるは、此の限りにあらず。其の或る事業を以て世に貢獻するの稱揚を値すべきは固よりの事、世に貢獻する所なきも、悪事を働かず、顧みて疚ましからずんば常に心の平和を失ふこと無し。九尺二間に住みながら、愉快なる氣象の眉目の間に浮ぶあるは之が爲めなり。

天國は汝自らに在り、心の樂しくば何物か樂しからざらん。但だ器の小なるは早く満足し、器の大なるは遂に満足せず。向上の慾なきは稱すべきに非ず、人々力の及ぶ限り發展に勉めざるべからざるも如何なる場合にも心に暗黒なからんことを期すべし。人一日も憂なきを得ず、一身に憂ふべきなきも、親戚友人に憂ふべきあり。或は國家に憂ふべきあり。世界に憂ふべきあり。茫仲流の

これは「五月」の中にある一節である。

憂亦天下の憂に先ちて憂ふと云へる、故なしとせざれど、心に疚しきことなくば、憂ふと雖も度を失ふに至らず。心の樂ますんば、花を観るも樂まず、心の樂まば、花を観ざるも樂む、花を観て樂み、花を観ずして樂しむ。ラスキンは如何なる天候も樂しからざる無しと云へり。要は心にあり。

印象 苦しいと思ふのも、樂しいと思ふのも、實際自分の心の持ちやう一つできまることだ。

八 花風去り葉風來る

北方の地猶ほ五月山櫻初放蕾、曉鶯聲自樹間傳の處あれど、一般に花風去り葉風來り、收盡紅雲展翠帷と謂ふべく、春色惱人彼一時とも歎すべし。

想 痕

園より櫻花後に花なきにあらす、園園藤花等序を逐ひて咲き、特に草類の花、正に是より妍を競ひ、紅紫野に満たんとす。但だ謂ゆる花風は樹上よりし、草下よりせず、これはくさくさ歡美するが如き、仰いで觀ずんば能はず、歐米は木花よりも草花を好み、草花の盛なるを花の季節とし、我國亦漸く此嗜好に長じ來れるが、草花は最も栽培の宜しきを要し、自然の趣味と人工の趣味と孰れか多きを決し難し。

自然と人工と區別の判然たらず花の美を進むるは自然美人工美を競はず所以と爲し得んも、人工を加へて自然に優るあると共に、竟に自然の總てを奪ふ可らざるを認めざる能はず。時には人工に飽きて自然と俱にするを欲する、恰も牢獄より娑婆に出でんごするが如きあり。自然美の多きよりせば、七寶花瓶の薔薇より庭園の花壇を選び、庭園の花壇より野生の梅櫻を選び更に花なき翠色

綠蔭を擇ぶべき無しとせず。垂柳陰を交し、疎松翠を滴らす處、往々去るを得ざらしむ。

花風の期間は短く葉風は長し、長きは珍らしからず、珍らしからざれば出でて遊ぶを欲せず、而も心を娛すには宜しく、氣を養ふに宜しく、最も體を健にするに宜しきは、翠色綠蔭に若かさらん。松や杉や、檜や、樅や、千樹萬樹に天に參はる、則ち自由の氣の磅礴して鬱積するを覺ゆ。自由が山中より出でしとは單に文字の末に止まらじ。影搖三千尺、龍蛇動、聲撼半天、雨風寒といふ類、誠に大丈夫を形容するに足らずや。花は悦ばしきも、常に満開なれば幾人か之を趁ふべき。綠蔭を趁ひて逍遙するは凡衆の樂まざる所を樂む者、眞に幸なる哉。

印象 あの五月の若葉の影をゆるがせて居る風に吹かれて居るやうな氣が

してならない。

九 優等生よりも實力生

官私大學生は今や學年試験若くは卒業試験に忙しく、概ね全力を注ぎつゝあり。小學に入りて以來斷えず試験を受け、頗る受験に長ぜるも、尙ほ試験ほど心を惱ますはなし。及落を憂へざれば級順を憂ひ、或は優等生たるや否やを憂ひ寤寐に試験を忘れず。官廳を始め銀行會社等特別の事情なき限り、皆な級順にて人を採用せんとし、下より算へらるゝ徒は何處にも相手にされざるが故、平生不勉強を極めても、遽に勉強家に變ぜざるを得ず。銀時計には及びも無いが責めて上から算へられう、斯る了簡にて、髭髯蓬々たる男兒も頻りに筆記録を讀む。

これは「六月」の中にある。節である。

獅子象を搏つに全力を以てし、兎を搏つにも全力を以てす。況や狐の如き、全力を以てせずんば兎を獲ず。學生が全力を以て試験に臨むは事の然るべき所何の怪むべき無し。されば全力は意義廣汎獅子の兎を搏つ時一心不亂なるも、決して象を搏つ時と同じからず。千鈞之弩不爲三鼯鼠一發步機、萬石之鐘不爲以尺挺一起步音、試験を專一にし優等生たるを期するには、關係教授の思想及び趣味に同化するに若かさるが、天稟の特質ある者が期して斯く型に嵌まるには、果して其の人の利益、其の社會の利益なるか、自ら任ずるの大なれば如何にして他に同化すべきや。

校則は守るべく、試験を受けよとあればこれを受くべきも、學校は學力を養ふ所、學力を養ひ得れば足る。試験に優等なれば種々の便利を得べけれど、さる便利は人に依りて事を成す者の喜ぶ所、雄偉倜儻の士に於て何か有る。實力

の備はらんか、十年二十年優等生に及ばざるも、最後に高く飛翔して其上に超
出せん。優等生は初め吉、後に凡、實力生は初め凡、後に吉、其の孰れかを擇
べよ。孔明が三分を圖り、ピットが首相と爲りし年齢に於て、汝々汲々試験の
點數を争ふなど、顧みて恥かしからずや。試験は有爲の青年の心を動かすべき
者ならず。

印象 肩書などよりは實力だ、實力を有つて居るものは何處へ行つても決
してひげはとらない。

一〇 歸省する幾萬青年

夏期休業中、首都學生の各地方に歸省する。万を以て計ふ。地方の學生より
郷里に歸るも少からず。地方より都に歸る、亦之有り。京都大學及び第二以下

これば「七月」
の中にある一
節である

高等學校よりする即ち然り。斯くて全國を通じ歸省する者の多き七八月に若く
はあらず。七八月は歸省の季節なりと謂ひて妨げなし。樹欲靜而風不止、子
欲養親不待矣とは屢々世間に見る所、人は此悔なきを期すべきも、而も親は
唯だ子を養ふを樂み、少しも子に養はれんとせず。普通の順序よりせば、親に
とりて一家團樂より悦ばしきは無し、青年の歸省するは誠に孝の一端、父母在
不遠遊、遊心有方若し歸省し得んか、務めて歸省せよ。

歸省は他に意義あるに非ざれど、學校教育の水、家庭教育に重きを置けば、
特殊の意義を認めずとせず。家庭の子弟に及ぼす所、種々除外例の存し、嚴格
の家に放蕩兒の出づるも、多數を概括するに青年の墮落すると否と、主として
家情よりすると明言せざる能はず。家庭の温かくして趣味多き處己れ一身を專
にし、人生を嘲り社會を呪ふが如き寧ろ頗る珍らし。樂觀悲觀は生理的に基つ

くも、家庭に缺陷の少くんば、均く悲觀しながら、僻み根性の見えず、煩悶懊惱の中絶えず、救済を敢てする跡の顯はる。

父母は實父母、兄弟姉妹は實兄弟姉妹、謂ゆる水入らずなれば、或る出来事なき限り、順當の發達を遂ぐるに何の困難を見ず。時として内に闕ぐも、殆き遊戯の一種特に苦々しき事なし。斯るは歸省して得る所の多からん。之に反し繼父母なるか、養父母なるか、妾の跋扈するか、多少人情の自然を缺けるは、一概に云ひ難けれど往々拗くれるに傾く。斯るは歸省して得る所の少からん。間々假父母にして實父母に優り、或は假子にして世に傑出するあるが、歸省の價値を考ふれば、此邊に想ひ及ばざる可らず。幾万青年、家庭は何の狀、其の平穩なるは幸福なりかし。

印象 學生が、いかに歸省を樂しむかは、言を俟つまでもないことだが、

歸省して得る所のものは果して何であらうか。

一一 登山か水泳か其他か

青年にして、若くは老いて青年と同等以上の壯氣ある者にして、空しく休暇を過すを欲せざるは意想の種々なる中にも、差し當り登山か水泳か其一を擇ぶと見ゆ。見ゆるは必ずしも事實に合はされど全く見えざるに優らん。衛生家は登山及び水泳の體質にて效能を異にし、孰れかの一方に限るべきを説くも、病身ならざる間、特に擇ぶこと無く、唯だ嗜好と便利とに従ふべし。普通の身體なれば、富士山に登るに堪へ、且つ少くとも隅田川を往復するに堪へざるべからず、何の地方に在りても、之に相當する登山、水泳を事として可。

山にせよ、水にせよ、身體の運動に適するが、精神に益する所もあり。孔子

想 度

これは「七月」
の中の「一節」で
ある。

登山に登りて魯を小とし、泰山に登りて天下を小とせしは、傳説の疑はしきも
強ち形跡なき事にあらじ、川の上に在りて、逝者如斯夫、不_レ舍_二晝夜_一と云へり
しは、さもこそと思はれずや。將門が純友と比叡山に登り、帝城を望み不軌を
圖りしは、人寰の差別を超脱し、達觀を誤用したと謂ふべく、達觀を誤用せず
して正用せば、其れ丈け益を受くるを得ん。川に泳ぐと、海に泳ぐと、事の違
ふも、尋常の境涯を離れ、敢て新方面に入るの猛進性を養ふに與からずとせ
ず。

高山に登り海水に浴するは夏期のみなれど、休暇を利用すべきは此に限らず
比較的長期の休暇として旅行に適すると考へらる。而も他の季節に旅行し得ざ
るは格別將に單衣輕装を便利とするは格別然らざる上は、暑中の炎天を以て旅
行に適すと明言し難し。酷熱よりせば讀書は娛樂を兼ねて利益あり。決して多

きを厭はず、坐禪も少しく之に類せん。或は坐禪の眞劍勝負なるを云ふも、深
く拘泥すべきに非ず。已むに賢けれる者に至りては、碁あり、笛あり、釣あり
他にも幾種之れ有り。但徳川時代と時代の違ふを思へ。

印象 身體は丈夫でなければならぬ、山に登つてこれを鍊り、水に泳い
でこれを鍛へるもよい。

一二 陽氣なる夏

冬を以て最も陰氣なる時候とせば、夏は最も陽氣なる時候なり。烈日の赫々
なる、樹葉の萎々たる、眸に入る光景孰れか陽氣ならざらん。若し陽氣を好む
とならば、時候として夏に若くはあらず。一年を春秋といひ、震蕩と云ふも、
英語のサママーは年に通用し、三夏は即ち三年の義にして、實に夏が或る意味

これは「八月」
の中の一節で
ある。

想 痕

に於て四季の最も主なるものなるを示す。

世に陰氣を好む者あれど、陽氣を好む者の更に多きを見る。好まずとも、陽氣の恵みを受けるの多きを争ふべからず。暑熱につれて流行病の蔓延する恐れあるも、肺病患者の類は夏に入る毎に多少輕快に赴き、春寒の頃ともかく夏季まで維持すべしとて其の到るを待つ状あり。或は常に夏の如くならんことを欲して南方温暖の地を擇び、往々臺南の遠きに移る。されど病氣の中暑熱を忌むもあり、或は特別の疾症なきも暑熱に堪へずして之を避けんとするあり。避暑といふは、或る部類の人に避くべからざるものゝ如し。

夏季に入れば、大官は概ね休暇を得、其れ以下の者も多く休暇と爲り教員も生徒も一樣に避暑の工夫するが常なり。温泉及び海水浴場は多額の費用を要する處あり。即ち伊香保の如く、大磯の如く、驕奢を競ふ場所と爲れるある。而

も又半圓以下にして一日を過てし得るもあり。彼れ此れ相異なるの甚だしきも避暑といふは既に一般に行はるゝに及べり。休暇を得たる者の、或は水に泳ぎ或は山に登るは皆な可、適當なる時候に適當なる運動を行ふものにして、延いて精神の健康を増進するあらんも、保養を念とするに至り、聊か注意すべき無からず。

同一地方に留まるの病を招くべきを慮かりて轉地するは、健康なる身體に在りて決して稱すべきに非ず。毎年必ず避暑する者は、偶々事情ありて然るを得ざる場合、暑熱に苦みて病に罹ること、平素飲食に注意し過ぐる者が、僅かの不消化物の爲めに胃腸を傷ふあると同じ、病身ならば避暑するの已むを得ざれば、幸に健康なる身體を享けながら、病人氣取りして時候の變化に堪へずなるは、不心得の次第とす。

現在の社會にては、到底充分に規則づくめにするを得ず。何時如何なる變化に逢はんも測られず。随つて健康なる時に於て、成るべく變化に應じ得らるゝやう身體を鍛ふるを可とす。即ち暑には暑に堪へ得る如くし寒には寒に堪へ得る如くすべし。格外に不攝生を敢てするは咎むべきも、或る程度まで不攝生を行ふは、攝生の一方たらずとせず。さる不攝生は羸弱なる者にこそ害あれ、強健なる者をして益々強健ならしむる效能あり。

日本は夏暑く冬寒きも、暑しとて比律賓の如くならず。寒しとて浦潮港の如くならず。斯かる處に在りて寒暑を云々するは、強健なる人と謂ふべからず。從來の經驗に據れば日本は白人よりも一層寒さに堪へ得ると見ゆ。既に寒さに堪へ得て、而も又暑さに堪へ得んには競争に於て何か有るべき。然るに夏季なりとて之を避けんとし、剩へ人を誘ふに汲々たるは、果して事の宜しきを得る

ものなるか、須く暑には暑を樂しむこゝとすべし。其の間必ず樂しむを値ひするものあり。之を得ざるは得ざるものゝ過失のみ。

印象 夏避暑をせぬ者は人間でないやうに思つて居るものもある。虚榮に趨りたくはないものだ。

一三 夏日將に盡きんとす

今は晩夏か早秋か、陽曆にて七月は確かに夏、九月は確に秋なれど、八月は孰れに屬するか、北米は夏とし、英國は秋とし、日本は或は夏とし或は秋とし未だ決定せず、決するの日あるか、決するの必要あるか、姑く之を措き、漸次夏景の秋景に移りつゝあるを見る。溫度は七月より高きことあり、下旬の下旬より高きことあるも、日を逐うて晝は空の青きを加へ、夜は星斗及び銀河の明

これは「八月」の中の一節。

想 痕

漸を加へ、一葉の落つるを視ずして秋の近づき來れるを覺ゆ。されど夏は去れるに非ず。去るも遠からず、風聲雨聲蟲聲、將た月色、絶えて寂寥を感じしめず。

春秋に富むとは少壯の事、春秋の高しとは老年の事、單に春秋といへば、儒家の五經の一なるが、曾て夏冬を以て才を意味せし無し。春と秋と氣候の相類し、才の別名として、夏と冬と氣候の相反するに若かさるに、春秋の語ありて夏冬の語なきは聊か奇ならずや。其の何故なるやの判明せざるも夏冬の代りに裘葛の語あり、夏葛して冬裘し、一たび裘葛を被るは一たび才を経る者一裘葛と云ふ方、一春秋といふより意義あるらし。春秋には裘葛と云ふが如き無し、外界の變ずること、夏冬は春秋より遙に多く、實に極陽よりして極陰に轉ず。支那に三餘とて冬は才の餘り、夜は日の餘り、陽雨は時の餘とあり。冬を才

に入れざれば夏冬の語の出づるも無きが、夏を才の餘とする類は決して之れ無し、春秋は膚に適し或は春秋のみなるの望まれるべき、夏は不愉快なる季節に非ず。苦熱の歎あるも餘りに酷ならず餘りに長からざる間、宛ら湯に浴するが如き愉快あり。常に熱帯に住居するの好ましからずして、而も時に印度墨西哥等に滞在するの愉快なると同じく、夏日に特殊の愉快を感じずべし。而して其の夏日は今や漸く盡きんとす。秋景の大に稱すべきも、顧みて少しく残り惜し。

印象 夏はいつまでも續くものではないが、それと別るゝ時の心持は果してぎんなだらうか。

一四 活動に可、安靜に可

華氏六十三度は執務に最も適當なる氣温と稱す。常に執務のみならず、遊樂

これは「九月」
の中にある一
節である。

にも然り、體質もあるべけれど、平均數に於て疑ひを容れず。目下七八十度、時に八十度を越し、尙ほ残暑の候なるが、日一日低下し、漸く至適の度に近づく、春の温度は略々秋と同じく、爽氣肌に適するも、一は寒より熱に向ひ恰も體の膨脹し溶解するが如く幾許か倦怠し、間々逆上の氣味を生じ、一つは反對に熱より寒に向ひ、恰も收縮し凝結するが如く、精勤し熟慮なるに傾く、實に神魂飛越の趣きに於て春に若かされど、進むに勇なること匈奴の出軍に類し、退いて安んずる事歸去來辭に類せしむ。

肩させ、裾させと虫の聲を聴くは、秋と共に勤勉を聯想する者、虫の聲即ち自らの聲に過ぎず、裁縫を想ふは寒苦を察するよりし、寒苦を察し、茲に陰氣を感じるが防寒の如き、世間活動の一部分、他に攷々業務に取掛かるの幾何なるを知るべからず。馬は肥え人は肥ゆ。人にして爲すべき無き、則ち腕の鳴る

を覺え、何處にか、何事にか、發せざる能はず。水陸運動會の盛なるが如く、政界、新界、學界、藝界、商界、工界皆齊く多小の活氣を添へ、變化なき農界さへ正に收穫に忙しく且つ明年の爲に計る。凡そ秋に入りての執務は殆ど全力を致す者、以て一年間に於ける又自動勉の最高度測定をするに足る。

採菊東籬下、悠然。然見南山陶潛一の去りしは別に事情あるも田園の秋景を思へる無からんや。官に務めし張翰、一日秋風の起るを見、郷里の蓴羹鱸膾を思ひ、辭して去る曰く、人生適志を貴ぶ、何ぞ幾千里外に名爵を要せんやと。他に事情あるも、秋景に誘はれし所なしとせず。秋は寂寞なれど、寂寞に寂寞の趣味あり、散歩に適し、讀書に適し黙想に適す吾心以て秋月、碧潭光皎潔の概あり。秋や進んで活動するに可、退いて靜居するに可、將に二者相兼ぬるに可。道德先生迷道學、風流才子醉風流、山鐘驚破二家夢、萬壑雲收月滿樓、秋の月

を詠ぜし蛻巖の此詩一興。

印象 秋は眞に活動にもよいし、思索に耽るにも適して居る。秋はいゝ、秋はいゝ。

一五 百鍊して秋水の光

正氣の凝りて百鍊の鐵と爲るは、東湖が文山に倣ひ、文山の想はざりし所に出でにき。東湖の正氣歌は比較的切迫せる疑あり。或は以て島國の故なりとするが、寧ろ鐵火を恃むと否との與らずや。謂はゆる島國大陸の差は英佛に於て如何にか見るべき。支那は鐵の使用を熟知せず、古以て鋼爲兵、至る於秦時、攻争紛亂、兵革互興、鋼既不克給、故以て鐵足之なき、鐵を銅の補助視せしは、武器の製作に精からざりしを證す。國外より輸入せしが爲め、金偏に夷を

これは「十月」の中にある一節である。

書するとの説は、必ずしも附會ならず。凝爲百鍊鐵。銳利可斷。整正氣に就て此句ある、支那に於て考へ及ばず。

秋水帶霜寒といひ、凜々寒光耀ニ霜雪といひ、支那の刀劍を形容する略々盡したれど、秋刑官也、於時爲陰、又兵象也、於行爲金といふが如く、修辭の末に過ぎず。日本は語を假り、同じく秋水といふも、漠然たる形容に止めず。武士の魂にして之を忘るゝは即ち身を忘るゝ者と爲せり。腰間秋水鐵可斷、人觸斬人、馬觸斬馬、時に弊の伴ひしも、此類の意氣や一旦外國と接觸し、刀よりして鐵砲、延て戰艦、百鍊の鍛鋼鐵を以て國士の疆域を擴大せし所以ならずや。國も人も自ら勝つを信じて然る後に勝つことを得。日本は鐵を生命とし兎に角今日あり。

鐵なる哉、鐵なる哉日本の支那より小、而も支那より強く、支那より進める

想 痕

これは「十月」
の中にある一

は、鐵を貴びしに基く。歐洲は鐵を使用する我に優り、爲に動もすれば先進國の名を受く、伊に獨逸皇帝世々戴きし鐵冠あり、拿破崙一世之を戴き、鐵冠勳章を設けり。一種の傳説よりせしなれど鐵に重きを置くと照應せざるに非ず。不屈不撓なるは、身を鐵身(ライオンシヨンス)心を鐵意(ウイヨン)といふ。支那にもさる語あるが、歐の普通なるに若くは獲し。東湖が正氣の表現として百鍊の鐵を云へりしは善し。發爲「萬葉櫻」と云へりしを以て愈々益々善し。

印象

秋の朝、霜を見て斯ういふ感じを起すものが果して幾人あるであらうか多くは看過し去るに過ぎない。

一六 銃

獵

銃獵の季節と爲りたれば、是よりして、銃を肩にし綱を腰にして街路を往來

節である。

する者を観る、當に多かるべし。トーマス、ジエフアルリンの曰ふ、運動法としては散歩を好しとすれど、銃を發つは兼ねて精神の爲にも宜ろし獵は實に最好の運動なりと、獵は身體を健全にし、兼ねて精神を快活ならしむ。其の運動法として適當なるは洵に此の言の如し。然れども我が今日の獵家の如く、只銃の撰擇に意を勞し、村田銃にては恥づかしとてグリーナー式二連銃を採り、價は則ち百圓二百圓乃至三百圓偏に其の高きを以て他に誇り、而して服裝亦之に稱ひ人車を驅り案内者を雇ひ、茶店に入りて多分の茶代を投與し、以て豪富を装うて得々たる、固より銃獵の旨意に適へりとせず。況んや其の歩行する處は則ち平夷の路たゞ犬を縦ち禽鳥を驅り出ださしめて射撃するのみなるをや。斯くして樂むの必ずしも不可なりとせされと、美音を發ち囀づる小禽を射殺して娛しまずとも、娛樂を得るのは他に途多く之れ有るならん。

想 痕

均しく多くの費を要とする、微々たる小禽を得んが爲め之を費すよりは、更に遠隔の地に赴きて一層大なる鳥獸を獵るの、身體に益あり且娛樂多きに若かず。特に現今銃家の衆き、通常人跡繁き山野河川にては目覺ましき獵獲を期すること難し。深山幽谷行人罕れなる處に於て試むるか、然らざれば朝鮮に行き、又は支那に赴きて大に鳥獸の群を獲るべし。朝鮮には虎狩なるものあり。而して邦人之之を試みし者未だ多からず。若し多數相率て彼地に渡り、虎群に其の技を試むる亦頗る興多からずや。

獵を試むるは庭園に遊ぶと自ら異なり、成るべく豪快なるを旨とすべく、銃の高價なるを誇り服装の美なるを競ふの餘裕なき僻地に赴きて、其の技を揮ふべし。蓋し斯る僻陬の地に於て銃を携へ馳驅するに非ざれば、以て銃獵の効を驗する能はず單彈を裝填して走獸を斃すに非ざれば以て銃獵の快味を感じる能

はざればなり。美音を弄する小禽の如き、獵師の捕獲して膳に供するあれば之を賞味するの不可ならざれど自身獵に赴く際は必ずそを眼中に置かざれ、若しかゝる小禽を射殺するの己れの伎倆に適するを信する、乃ち銃獵を廢して射的若くは玉笑に身を委ねよ。將たそを外にして、類似の遊戯は尙ほ多々之れ有り。

但夫れ殺伐なる銃の如きを用ゐ、而して是に依りて身神の快を併せ得んとする。亦全體に於て殺伐なるを念とすべく、深山幽谷行人罕れなる處に走獸を逐ふより良きはあらず、徒らに銃の高價なるを誇り、服装の華美を競ひ、人里近き田野に逍遙し、小禽を射殺するは、寧ろ銃其物に對して愧べき所行なり。近年銃獵する者は途中相會ふ所の同好者に對して輸くる無からんと欲し、勉めて此點に腐心するの狀あり。眞に銃獵の旨を解せざるもの事なり。改めずんば

有るべからず。

印象 形式に流れてその實を等閑に附したがるのは今日の弊だ、獵を樂むものは、獵の本能を解すべきであらう。

一七 秋の小春日本晴れ

文明國にして降雨多き、日本の如きは稀れ、日本は雨國なりと謂ふべく、特に本年首都附近に降り續き、河川の溢れてさへ尙ほ晴れず、半日晴、則ち數日若くは旬日雨、人或は因由を彗星に求めぬ。而も追に秋の小春、天氣漸く清朗殆ど全く曩日の雨を忘るに及ぶ。春にても、夏にても、晴天の快を覺ゆるあれど、太平洋沿岸は秋より冬に亘り天空拭ふが如く、日光爛然、海色山光之に伴ふ。例年天長節は必ずしも雨なきに非ざるも、概ね和暖にして清朗、春に似

これは「十一月」の中にある一節である。

て春よりも清し、小春は春ほぎ他に生氣なく而して天の麗色却て之れに優り謂はゆる日本晴れを見る。

日本の雨と英國の霧と孰が鬱陶しきかは姑く措き、英國に小夏(サマー)ありて小春の一時和暖なるを以て、十月十八日よりセントリユク小夏とし、十一月十一日よりセントマーチン夏とす。されど和暖なるも清朗なるに非ず、濃霧益々濃を加へ來る。對岸諸國、斯く霧の深からざるも、アルプス以南の如く天色の美なく、其の關係は日本脊骨系の南北に異ならず、蘭なり、獨なり、塊なり、北信地方に相當す。突出せる伊半島は、嘗に天宇の爽朗なるのみならず、日没せんとして半天紅を發し、波濤色を變ずる。色彩の壯麗、我が日本晴れの氣象に彷彿たり。

日本晴れなる哉、我が天然美にして我が國人の未だ充分に價値を知らざるは

日本晴れなり。畫家は何地にも形體の研究を遂げ得るも、伊半島に往きて始めて色彩に悟りし所ある者少からず。或はマロツコに往て更に悟りし所あり、若し日本に生れ、日本晴れを畫にせんせざる思はざるも甚だしからずや。雨に雨の美、雪に雪の美あるも澄霽して碧瑠瑠なる、反照して光彩陸離なる、美なるものに非ずして何ぞ。帝國は南北に長く、北歐の天に接すべく、南歐北阿の天に接すべく、而して天に於ける天然美に通ぜざる、責は人に在り、日本晴なる哉。

印象

歐米の天と比較して日本晴れを大美となして居る。その自然美に富んだ國に生れた者は幸福ではないか。

一八 秋景漸く冬景に變ず

これも「十一」の節である。

菊花節より半月、秋景漸く冬景に變ず。殘楓晚菊上冬天(杏林)は十月望の事今は晚菊にして必ずしも殘楓ならず、正に燦輝として錦を織るあるが、是とて數日の中に落ち、爾後僅に常綠樹の遺るのみ、十月の望、支那の赤壁は霜露既降、木葉盡脫、人影在地仰見明月一顯而樂之、行歌相答、木葉盡く脱するの早きに過ぎるも、彼の附近は斯かる種類の木なるを示す。實に小春日和は非秋非冬秋、冬との過渡期なり。

秋の夜と云ひ「秋の夜は、長い者とは、眞圓な、月見ぬ人の心か」といふが夜の長きは冬至前後にして、秋よりも冬なり。然るに秋の夜を長しとするは、未だ寒冷ならず、屋外にも夜深しするを得るが故にて、秋なればこそ月を見て感ずれ、冬なれば月を眺むる無く、且夜の長きに慣て、特に長きを覺えじ、されど氣候に制せらるゝは、社會の程度の低き時代の事、其の高まるに従ひ冬に

想 痕

夜深しすること秋の如し。天凝り地閉ぢ、風動しく雪飛ぶも、屋内を春にし、不夜城を現出するに難からず、玻璃窓より月を見るべし。

秋の夕暮の淋しければ、冬の夕暮は愈然るが、寒氣の烈しくして感慨の浮ばず、冬の自然美を賞する迄に設備の整ふも容易ならず、而も今や屋内なるは略々備はり秋に入りて活動の旺盛を加へ、冬に入りて愈盛んなるを見る。議會の開院式は、豫算編制の後れて十二月下旬にするの屢々なれど、元冬三月を期せるにして、政治熱も此際に最も高く、或る點に於て交際季節たるを失はず冬の自然美を賞し得ざれば格別暫らく此れと別れ、人事に於て遊樂すべし。冬は秋の繼續にして一層勤勞を促す。

印象

秋について冬もまた活動すべきであり、思索にふさはしい時だ。そして秋には秋の趣きがあり、冬には冬の美がある。

一九 雪

これは「十二月」の中にある一節である。

死の運命は天下何人も終に遭ふことを免れざるもの、長しと雖も百歳を出でず、多くは則ち五六十にして歿し、短きは數年若くは數日のみ、蓮如の「御文章」にいふ「我やさき、人やさき、今日とも知らず、明日とも知らず、後れ先だつ人は、もとの雫末の露よりもしげしと云へり。されば朝たには紅顔ありて夕べには白骨と爲れる身なり」と。

想ふに夫の雪の空よりして降る、音無くして到り、而して萬有を埋没して遺さず、丘山川澤、竹木盧舍、凡て白装に化し、謂はゆる江山一色三千里、眼に觸るゝ所平等にして差別無く、白皎々たる景、極めて莊嚴、極めて靜寂、試みに之に觸るゝ、則ち冷寒骨に徹するを覺ゆ。あゝ是れ死の象ならずや、葬儀に

想 痕

列する者、總て悉く白色にして行く、或は總てを黒色にするの即ち國風たるあるも、黒は是れ白の反面を表せるに外ならず、其の着くる所のもの、黒ならざれば必ず白、二者其の一に居らざるは有らず、堆雪百物を銀装する間、崖壑あり。樹木あり、眞黒を點綴するの狀、豈相似たりとせずや。賢となく愚となく貴となく、賤となく、均く死に會ひて完了するは庶物の雪に會ひて愈な見えざると同じ、春生じ、夏茂り、秋實のり、而して總て盡く此の白色界に没し、復た能く免るゝ莫し。雪は寧ろ死神の現るゝものと謂ふ。

然るも雪多きは又豊年の兆と稱せらる。これ幾許か事實なり。將に又氣候酷寒、終歲雪を絶たざるの地、羆熊の兒を抱きて雪中に埋まり、僅に呼吸せる氣息の暖まりに因りて上方に一小孔を穿ち、以て大氣を通ずるあり。彼等は實に斯くして暖を取るなり。抑々又此の北方の地域に住するエスキモー人のごとき

氷塊を層積して屋舎と作し、其の内に居住す。是れ亦た暖を取る所以の者なり。極目唯積雪層氷、一點の紅緑を看ざる處却て生氣の其の裡に包容せらるゝあり、酷寒嚴冷、觸るれば膚を刺し骨に徹するの感を生ぜしむる物體の中には又却て溫暖の貯へらるゝあり。火山の雪に掩はるてふ譬喩を引かずとも、以て雪の凡てを葬むると共に又限り無き冀望を蘊めるものなるを察すべし。雪の降らんとして未だ降らざる、如何に積陰の氣鬱して散せざるの感あるか。其の滿地銀色なるもの、漸く光に映するの後如何に陽春の氣につれ心情の舒暢するあるか、死や、生や、斯くの若き者あるか。其の知るべからざる、猶ほ北極の窮むべからざるが如きか。

印象

冬に入るとすぐ雪を想ひ出させられる。これを讀んで居ると自分は正に雪中にあるやうな氣がする。

これら十二
月の中にあ
る一節であ

一九 老の到る到らざる

人生天地間、忽如三遠行客、知る可からざるより出で、一年にして一旅舎、數十年にして數十旅舎、而して再び知る可からざるに去る。一年を過ぐるは一年を失ふもの前路將た幾ぞ。歳暮に臨み浮世夢の如しの歎ある、強ち怪むに足らず、老の到るを奈何せんとは、古今東西に亘れる疑問にして、而も未だ満足を感じ得られず、死後に於ける靈魂不滅を別にし、現在のまゝ永遠の生命を享くるに就き、大略二種の説あり、一は或る方法を以て身體を存続せんとする者、一は事功を遺して後人の記憶に存せんとする者。不死の藥は人の欲する所、或は自然生なるを尋ね、或は之が製造を工夫し、殆ど得べきが如く考へられ、而して遂に得べからざりき。東に仙丹といひ、西

に黄金水といひ、一たび之を服せんとせし者擧げて計ふるに堪えず。今も尙類似の藥の斷念せられざるが、唯だ過去幾多の經驗に餘儀なくせられ、眞の不死を此に求めず、之を他に求むるの狀あり。即ち我が人格の後人の記憶に存し、幾代を過ぐるは、死すと雖も猶ほ生くるが如しと爲す。百年千年前に死して現に在ますが如くなるは、之を事實に徴するに難からず。

現在の世に不死なるは、此の如くなるべきか。大上は立德、次は立功、次は立言にて、併せて三不朽の稱あり。更に下りて芳を百世に流さずんば臭を萬年に遺すべしと唱ふるあり。名に渴するも此に至りて極まれり。而も生前死後の名の、畢竟何程の價値あるやは疑ひなきに非ず。有用の材の忘れられ、無用の徒の傳はれる、何ぞ一なりとせん。名を求むる事の至らざる者なり。孔子が發憤食を忘れ樂み以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らざるの如何はしき

も、斯くして老の到るとも何か有る。

印象 誰しも老ひることを好むまい。が、この運命には何人も抗するこゝ
は出来ない、唯身は老ひても心の老ひぬやうにすべきである。

修 養

一 職とする所を職とす

志を立つる素と一に限らず。或る者は政治家たらんとし、或る者は軍人た
らんとし、或る者は學者たらんとし、或る者は工業家たらんとし、商業家た
らんとし、その他百般の業務各々其の好む所を擇びて従事するあらんとす。且つ
同じく政治家たらんとする、軍人たらんとする、學者たらんとする工業家商業
家たらんとする、各個に就いて類別せば愈出で、愈多く、志す所の個々相

これは「人の
志を論ずる一
の節であ

異なる、恰も其の面の相異なると同じく、各自其の是とする所を是として身を
此に委ぬ。而して中に就き孰れが優孰れが劣なるやは、概ね其の事の何たるに
因りて判るゝに非ず。苟くも爲す所にして愉快の感と義務の念と兼ね存するあ
れば、其の人は即ち當然の事を爲せる者とすべし。之に反し、其の爲す所に不
愉快を感じ厭ひつゝ暇むるは、即ち事に役せらるゝ者にして卑屈の行爲と謂ふ
べく、又單に一己の愉快を感じせしむべき事を擇びて之に耽るは、理の以て慾を
制する能はざる者にして、陋劣の行爲と謂ふべし。其の爲す所に愉快を感じ、
而して分相應に暇むべきを、念頭に銘じ、安んじて業務に従事する。乃ち事の
何たるを問はず、一として是ならざるは莫けん。凡そ社會に存在する者、白癡
瘋癲若しくは悪事に偏傾せる不具者を除くの外、常識ある者の認めて以て是と
する所は、必ずや何等か世に必要ならざるあらず。一邑に與かる卑職といへど

も、營々として勤めて怠らざれば、以て其の分を果たすものと謂ふべく、夫の帝王と爲りて一國に君臨し四海を統御すると、人事を盡すに於て相軒軽する所ある無し。孔子の委吏と爲りては會計當るのみといひ、乘田と爲りては牛羊塗ぐるのみと曰へりしは、即ち是なり。委吏は卑官にして。乘田は小職たれども會計は必ず無かるべからざるもの、牛羊は決して缺くべからざるもの、無かるべからざるの職に居り、缺くべからざるの物を管し、而して屹々として其の務めに服事す。志しに於て他の民を統ぶると、何の差別か有らん。要するに己れの職とする所を快とし、敢て之を曠しくせざる、皆な等しく稱すべしとす。此の如き者が多きを加ふれば、其の加ふる丈け社會は益々進達すべく、而して個人に在りては、其の職に睚むるに因りて益々其の事に長ずるを得、俚諺に所謂好きこそ物の上手なれといふを、殆ど總ての事に於て認めん。社會の人皆其の

職に睚め、其の事に長ずるに及べば、社會の力は更に伸長し得べし。

職とする所を職とす、則ち立志たるに於て些の優劣あらず、皆以て稱揚するに足る。斯の如くなるも、其の志は亦大小を以て區別するを得べきに似たり。均く政治家なり、或る者は一郡を治めんと欲し、或る者は一國を治めんと欲し又或る者は天下を治めんと欲す。均く軍人なり、或る者は峨帽長劍馬に鞭打ちて揚々馳驅するを得意とし、或る者は聯隊に長として一命の下三千の士卒を使動するを得意とし、又或る者は大に外征の師を起し、攻城略地の勳功を累ねて以て顯名を當代に馳せ、榮爵を子孫に傳へんとす。均く學者なり、教育家なり各互に其の志を殊にせざるは莫く、均く工業家なり、商業家なり、亦皆然り、爲す所を以て類別せば、彼此相近きありと雖も志す所を以てせば、自ら大小の差違無きを得ず。ナポレオン二世、童時不平の語を發し、家人の此に對

三二四
して、斯かる事を咄くも何の益無しと云ふや、乃ち應ふらく、若し吾をして國王と爲るを得しめば、必ず此事を廢せんと、當時固より國王たらんと念の無かりしは明かなるも、亦以て幼稚なる腦裡に多少斯種の萌芽を包有したるを推知するに足る。ナビエル年甫めて十歳、己れの近眼なるを聞いて大に悦べり、蓋し嘗てフレデリック大王の像に接して、其の眼に異状あるを觀、又ブルタルクの書紀に據り、フィリツプ、セルトリアス、ハンチハル、皆獨眼にして、アレキサンドルの眼亦常人と色を異にせりと聞き、かゝる偉人の伍中に列し得べきを想ひしなり。劉邦の始皇を觀て、大丈夫當さに此の如くなるべしと言ひ、項籍の此を觀て、彼れ取つて代るべしと言へりし類、亦之と同じ。此の如く帝王となり元帥と爲りて、以て鴻圖を百世に傳へ芳名を千載に遺さんとせる者より觀れば他の營々として一郷一村を治め或は一郡一縣に長たらんとする物は

海に小且つ卑しき者と謂ふべく、兩々較視せば、大小相距ること遠しきすべし。乃ち其の志す所の種類彼此相同じに拘はらず、大小量を殊にするに因りて自ら豪傑たると否らざるとの差違あるが如きも、是れ一概に言ふべき事ならず。此の若きは、志の大なるよりは、所謂心の大なる者とするの寧ろ適ざるを覺ゆ。

印象 志を立てることは難い。世には徒らに大志を壯語しながら、何事もなし得ずに終る者が多いに見ても分るではないか。

二 試験の要

人生れて知るあらず。幼にして教導を受け、長じて經驗を積み、年數を歴て彌々成長發達す。蓋し人として成長發達するは、是れ其の自然を遂ぐるもの、

想 痕

これは「試験
を論じ運命に
及ぶ一節
である。

小學や、中學や、大學や、その他各種の學校や、皆實に能力を啓發し知識を擴充する所以、其の已れ自らに對しては、斯の如くして力を養はゞ則ち可、但人と關係を生ずるに及び、茲に他が爲めに試験せらるゝの已む可らざる者あり、學校の教員は、其の生徒の學力を知らんと欲して試験を行ふ。熟せざるの甚だしき者は熟せる者の妨害と爲るが故に、如何にか淘汰せざる能はずして、生徒に在りては、學校は已れの修養の目的とする處なるも、其の學校の秩序を保ち爲めに試験を受けざるを得ずとす。既に校舎を出で、新たに省廳に入り。爰に官吏として服事せんとする、亦直に他人との關係を生じ、延て試験を経ざる可らず、地位に従り官職に應じ、各々其の方面に必要な學藝を試験され、合格して始めて其の職に就くことを得。多くは初次に論文試験を行ひ、尋て筆記試験を行ひ、最終に口述試験あり、論文筆記の試験は、要するに其道に關する

三三

學力の深淺を検する所以にして、口述の試験は、之を實地に應用するの才を検する所以なり。既に已に試験を経、首尾好く官職に就く、是より以後復た此類の試験を経るの要なきも、就職の後に於ける上官の詮衡は又一種の試験にして服務の際に於て、如何に其の職に適するや否やを検せらる。斯種の試験や、輔弼の任に膺れる彼れ大臣といへども亦免れず。上至尊の御信認は、即ち大臣に對する一の試験にして、其の前に表現せる伎倆の多少及び興望の嚮背は參考に資せらるゝも御思召は寔に擇用の重要事たり。約説せば、當初一般の知識に就て試験され、次いで或る特別の知識に就て試験され、更に省廳に必要とする學藝に就て試験され、口述應試の際に於て多少運用に關する才能を試験され、而して爾後の服務に於て唯だ全く才能を試験せらる。畢竟試験を以て始終すといふも不可ある無し。更に他の會社商店に觀る、省廳に行はるゝ試験の順序整

想 痕

然たるが如きは之れ無きも、間接の試験は常に茲に行はるゝを見る。則ち適するや適せざるやを檢せられ、適する者は之を探り、適せざる者は之を罷め、採擢罷免偶然にあらず。

能力を啓發し、知識を擴張する、其の人一個の上に於て當然爲すべきの事に於て、而して其の試験さるゝの、則ち他人との關係に出づること前述の如し。然るも人類は元來、太だ複雑なるもの、其の頭腦の試験は、金石を試験するが如く爾く單純なるを得ず。人類以外の物に對しては、已に實驗室の設けあり、且つ種々の試験の行はるゝに反し、人類に對する試験の方法は未だ講究せられたる多からず、齊しく金石といへども、御影石の如きは、何れの部分を取りて檢するも、其の成分の比例を以て全體に於ける比例を判知するを得ず。況んや複雑なる人類の頭腦に包含せる知識は其の一部分を取りて檢するも、竟に其の

全體を量ること能はず、人類の頭腦は量るに難くして更に種々の教育を施し、以て開發し以て注入する所あり。其の如何に保存せられ、如何に活用せらるゝを判定するの一層難事たる知るべきのみ。然るに謂ふ所の試験は、唯だ一部分を瞥見して事を決するに止まり、之に合格し能はざりし者は、爲めに上級に昇進するの途を阻止され依然原級に残らざるを得ず。或は是を卒業するとも、更に程度高き他の學校に入らんとし、而して入學試験に合格せざるが爲めに然るを得ず。或は大學を卒ふるとも出で、仕官を求めんとし、而して文官試験に合格せざるが故に然るを得ず。時異に人同じからざるも、試験の爲め一時若しくは永遠に目的を阻礙せられ進路を梗塞せらるゝ者、察し來たれば、世固より其人衆し。其の試験に應ずる、唯だ各人の蘊蓄せる知識の僅少部分を發露するに過ぎずと雖も、動もすれば、其の人一代の運命に關すること頗る大なるあり。

此に於て試験は人の最も憂慮し、又最も恐怖する所と爲りたるなり。然れども試験の要は、其の人の他を共同し、若くは他に附従して事を執らんとするの際に起るもの、即ち他の爲めに試験に應ずるの外ならず、學識博洽にして才智群に抜くといふも、其の學識と其の才智とにして他の望む所に應ずる能はざらんには、以て此れと共同し若しくは附従して事を執るに適せず、試験は其の人の有する學才智力の全體を證明せんが爲めに行ふに非ずして、如何に或る特別の方面に用を爲すかを量らんが爲めに行ふなり。隨ひて成績の好否は能力の多寡に比例せずといへ。試験を善くすることは、其の一方面に於て最も必要なりとせらる。

印象 試験に伴ふ弊害もあるだらうが、やはり試験は必要だ、これあるがために能力を啓發することが多い。

これは「修養」の中にある一節である。

三 凡人主義の得失

凡人主義とは識者の往々口にする所、凡人たるを希望すること、凡人の解釋次第にて必ずしも不可なりとせず。されど徒らに功名を求めざるの頗る稱すべきにせよ、世の所謂凡人たるに甘んじて可なるか。

従來先輩の後進を戒むる、必ず小成に安んずる勿れといへり。小成に安んずるは即ち凡人の事、凡人たれといふは小成に安んぜよといふに同じ。是れ果して後進に勸むべき言なるか。人の多くは凡人たらざらんと欲するも能はざるに非ずや。

凡人たれと勸むるは、凡人の資質にして凡人たらざるに勉め、爲めに甚だしき困難に陥るべきを慮り、之をして初めより凡人たる分に安んぜしめんと云

ふならば、其の後進に對する親切は多少聞えざるに非ざるも、人に勸むるに自ら道あり、凡人たれと説くの得失は、疑ひなしとせず。

進化の世に在りて何人も向上を要す。人々皆向上を念として、然る後社會の向上得て期すべし。向上は必ずしも偉人たるを理想とせざるも、人々各其の分に應じて爲すべきを爲し、以て精神上若しくは物質上に進む所なかるべからず。

人の知ると知らざるは意に介するに足らず。唯各々人たるの道を修むるは常に心して忘るべからず。英國に於てセントルメンたれと言ひ、米國に於てシチズンたるに愧る勿れといふは、皆な偉人といふを以てせずして而も能く人を鼓舞するに足るもの、凡人たれといふに至りては、何の意たるを解し難し。

進化の世に在りて凡人たれと勸むるは、大勢に背く。特に新興國たる我が日

本に在りて之れを勸むるが如き、若し人々皆其の言を聽いて、向上の念を失はんか、爲めに進歩を遲滞せしむること少からず。

自ら其器に非ざるを悟らず、偉人たらんとし英雄豪傑たらんとして失敗を招く者あればとて、轉じて凡人たらんことを勸むるも亦事の宜しきを得るものならず、君子は獨りを慎む。獨りを慎みて聞達を求めざるは或る意味に於て偉人たらずんば少くも君子人たり。世に知られざるも、決して凡々たる凡人にあらず。

印象 志は大きい方がよい。隨つて凡人たると云ふより、偉人たることを念とすべきだ。

四 時代の爲にせよ

想 痕

これは「修養」
の中の「一節」で
ある。

時代に超出するは善し。人は此の心掛無かるべからず。而も己れらは或る時代に生命を有するもの、而して人生僅かに五十、永きも百歳を出でず。己れより以前の時代に現はるゝこと能はざれば又己れより以後の時代に残ること能はず、たゞ其の生を享けし時代に於て事を爲すの外なく、將時代を超出すといひて漠然爲す所あらんとするも、終に何の得る所なけん。時代を超出するは其の自ら心を用ゐるの大なる所、苟くも事を爲すに當りては、唯宜しく其の時代の爲めにせんことを念とすべし。

前の時代には前の時代に生れし者相共に事を爲し、後の時代に生るゝ者相共に事を爲すべし。故に己れは唯己れの生れし時代の爲めに事を爲せは可、又必ず己れの時代の爲めに事を爲さざるべからず。而して己れの時代の爲に事を爲すや。或る事を經始し、子孫をして之を繼續せしむるの稱すべきも、己れの生

れし時代を顧みず、友を千歳の後に求むと稱し、何事をか爲すあらんとするが如きは誤れり。若し友を欲するならば之を其の時代に於てすべく、其の時代に友なくば、友なきも妨げなし。何ぞ千歳の後に待つを要せんや。

千歳後の事は千歳の後に之を爲すの人あり。たとへ千歳の前に在りて千歳後の事を爲し得るにせよ。そは全く餘計の事なり。千歳の後を念ひて同時代の事を忘るゝは、時代の爲めに不親切なる者にして、己れの父母兄弟及び關係の人々を忘れて千歳未知の人に戀々たるなり。況んや千歳の後とは極めて覺束なき事にして、實は百歳の後さへ測り難く、十歳の後さへ必し難きに於てをや、斯くして徒らに遠き時代に空想を描くよりは、偏に其の時代の爲めに盡くす所あるの優れるに若かず。是れ人として爲すべき最も順當の事たり。

されど時代の爲に拘束せらるゝは不可なり。時代に先んぜんとし、若くは時

代に後れんとする、兩ながら時代の爲めに拘束せらるゝものなり。此の如く自ら好んで時代の拘束する所となりては到底時代の爲めに貢献し、時代の爲めに自由に活動すること能はざらん。故に人は時代を超越して、而して能く時代の爲めに活動するの心なかるべからず。

印象 時代に生れてその時代の事を爲す、その心があつて、始めて國家を大にすることが出来るのであらう。

五 大 臣 熱

官尊民卑の風は今尙ほ存在し、今後も急に變ぜざるべく、至尊を名譽の源泉として順序の當然ともせんが、大臣に重きを置くこと前の如くならざるは、明かに事實の上に認めらる。政界に奔走する者は、概ね自ら大臣たらんことを欲

これは「大臣以上」の志ざせよの一節である。

し、之を欲せざるは到底希望なきが爲めにして、全く斷念せざる限り、或る機會を得て大臣たるを待ち設けざる爲し、此等の人々の間、大臣といふ語は頗る強く耳底に響き、確かに大臣熱の熾なるを見る。一般に大臣に對する感想は徐漸々冷却し、内閣更迭毎に冷却の度を察すべし。

固より維新當初よりして、多少顯官の價値に疑ひを挾む者あり。舊幕の遺臣にして官に仕るを欲せざる者は、大臣參議を睥睨し、其の國政を擔當するに足らざるの器なるを言ひ、他にも種々の點よりして批難を加へしあるが、何分にも大臣參議たりし者少く、大臣參議たる、國家の第一位を占むるを意味し、世に能く此に拮抗するある無く、國民の大多數は、時の事情を知ると否かを問はず、其の官名を聞き、直に英雄豪傑なりと考へたり。三條、岩倉、西郷、大久保、木戸等、人の仰いで標的とせし所なり。

想 痕

後元勳の前後して逝き、伊藤山縣等の元勳として聞ゆるに及びしが、政黨員に於て時に烈しく攻撃するに拘はらず、局外者は尙ほ段違ひなるかに思ひ、之を攻撃するを以て天を仰いて唾きするの類と言へるあり。然るに卑官より昇りて入閣する者の増加し、已代治謙澄として嘲りし者も入閣し憲政内閣に浪人政客の入閣し、次いで所謂大學の小僧まで入閣し、漸く大臣の與みし易きを知りたるが、今は此等入閣者と同じく明治の官歴を経たりし者、學窓に於て先進者たりし者頗る多く、而して嘗て己れの屬官なりし者、若しくは門下生なりし者の大臣と爲るを觀。聊か輕侮の念なきを得ず、其の各何等かの位置を占めて社會に散在するに共に、全く關係なき者も、大臣の特に傑出せる人物ならざるを認むるに傾く。

前にも内閣更迭に際して種々の魂膽あり。聞いて痛恨すべく、噴飯すべきあり

りしが、廣く世間に傳はりしこと少く、傳はれるも、日を経ての事なるに、近く元老會議にて首相を定めんとし、甲が辭して乙を物色し乙が辭して丙を物色するなど、元老の威望なきの知れ渡り、首相職さへ斯く人の避くる所なれば平大臣の重きを置くに足らざるは勿論の事にして、大臣の更迭を觀ること明治十五年前の大小輔の更迭に於けるより軽く、或は大丞の更迭に於けるより輕し勸業銀行の山本氏が藏相と爲りし時、他の若干銀行の重役は、吾も吾もと腕自慢し、財政何か有るの抱負を示し、が次いで若槻氏の藏相と成るあり、稍々大なる銀行の頭より觀て、一の青二歳に過ぎず。濫澤男は辭禮を重んじ、大臣閣下といふべきも、婿なる阪谷の後進にして、殆ど一の使用人の如く心得べし。此と同列なる大臣は、一律に言ひ難きも、大銀行頭取、大會社社長之眼には餘り有難く視えず、己れと同格以上に認めんとはせざらん。大學の古參教授が

柴田文相を見繼りしも怪しむに足らず。

年々大臣を輕んずるに傾くは、掩ふべからざる事實にして、是れ大臣の貫目の足らざるに出で、若し一層貫目ある者の内閣に列せば、内閣其物をして重からしむべきも、斯かる事は、或る著大なる變動なくして有り得べきに非ず。現狀にて推し行く限り、大臣の貫目の次第に減するを免れず。唯だ首相及び或る特別の大臣が國內有数の人物とし知らるゝに止まり、平大臣は概ね銀行會社の重役と多く差別せられざるべし。斯くありたりとて、必ずしも政府の威信を傷つくるを憂ふべきに非ず。斯くありてこそ社會の種々の要素の發達し來れりと謂ふべけれ。

印象 生れて宰相たらずんばと、大臣を目標にしたものだが、今日では實際それ以上に目標を高めるの要がある。

六 似て非

これは「修養」の中にある。

似て非なるもの少からず、智と狡、勇と暴、儉と吝、禮と諂、改善と變節、固執と拘泥等、皆な毫釐の差千里を致す。

自信と自利も混じ易く、自信らしくして所謂我利々々なること往々之れ有り。自ら信ずるの厚く如何なる危険あり如何なる誹謗あるも頑として變らざるは、頗る稱すべきも、唯だ己れの利を見、他に何様の不利益を及ぼすを慮らず、不徳と呼ばれ殘酷と罵らるゝも恬として顧みず、たゞ貪るに専らなるが如き形に於て自信の厚きに似たれど、實は財あるを知りて人あるを知らざる者、寧ろ唾棄すべし。

自信と狹量も亦混じ易く、狹量なるの自信と誤認せらるゝこと稀ならず、自

想 痕

三三二
ら信ずる所を言ひ自ら信ずる所を行ひ、事の此に違へるを排して一步も譲らざらんとするは固より不可なきも、獨り己れを正しとして他の總てに耳を假さず荷くも己れと同じからざるは、盡く以て非なりとし、之を拒み之を斥けて已まざるは、好んで自ら狭くする者、何の稱すべきを見ず。

自信と傲慢も亦混じ易し、己れの信ずる所を執りて屈せず、千萬人と雖も吾れ往かんの概あるもかく屈せざるを以て豪なりとし、他を視ること螻蟻も嘗ならず、此と言葉を交はすをだに己れの見識を墜し、品位を下ぐるかに心得、自ら高く標置して得々たり揚々たるは、一の高慢狂を謂ふべし。

自信は人に缺くべからざるも、此の一事のみ缺くべからざるに非ず、天上天下已れ一人の爲めに存せず、己れの欲せざる所之を人に施す勿れ、己れの欲する所之を人に施せといふこと、亦務めて悖らざらんことを要す。唯だ自利を念

とし、狭量にして人を容れず、傲慢にして他を侮るは、たとへ自ら信ずるの篤くとも、恰も藥毒相混ぜしが如く、自信に似て大に非なる者なり。若し、古來豪傑にして人を人とも思はざる者ありしならば、是れ其の缺點にして惜むべしと爲す。

印象 似て而して非なるものが、世間にいくらもある、これを穿き違へると飛んだことになる。

七 死の悲み

人の死は悲しむべきもの、自ら死に瀕して之を悲しみ、知る者も皆之を悲しみ、其の悲しみを慰めんが爲め、種々なる工夫を講ず。宗教は別に要素を備ふといふも、死を慰めんとする所少からず。

想 痕

これは「修養」の中にある一節である。

然れども人の死を悲しむは、死其物を悲しむよりも、其人の天壽を全くせざるを悲しむ、其の人の尙ほ爲すべきありて終りに之を爲すこと能はず、若しくは其人の逝くが爲め、此に關係ある人々の寂寞を感じるよりして之を悲しむこと多し。而して是れ人情の當に然るべき所なり。

然れども人の爲すべき事業は、大抵六十歳にして終る。六十を踰えて尙ほ爲すに堪ふるとせんか乃ち七十にして終る。長きも八十を過ぎず。既に九十に達すれば、已れ何の目的もなく他も亦何の希望を囑せず。百歳にして死するに至りては、死者自ら悲しむ所あらず、他も亦稀有の長命者として惜むも、死を悲しむに於て頗る尋常と異なり。所謂老病にて死するは、已れも人も特に悲しとせず。

人の死を悲しむは、實に其の天壽を全くせざる所に存す。年少しく老ゆれば

身體衰弱し、偶々病に冒されて斃る。我國にて死者の平均年數四十歳以下にして比較的最も長命なる國人とても、五十を出づる僅々、乃ち我が知る所の多くは、人生猶ほ爲すべきの齡を以て死する者、其の優に事業を爲すべく、又た親戚朋友と與に俱にすべくして然る能はざるの故に、自他悲哀の情を懐くこと、一層切なり。今後衛生の益々進むと共に、死者の平均年數も自ら高まり、老耄を防ぐの難くとも、天壽を全くするに近きを得ん。かくて人多く六七十年齡を保つに至らば、死に對する悲哀は漸く減すべく、更に一百歳に達し、全く耄衰して眞に天壽を終はるに及ばず殆ど悲哀を伴はざることゝ爲らん。惟ふに今後斯かる點よりして、死に對する恐怖の念を減するを得んか。

印象 死は果して悲しむべきものであらうか、死してもまた生きて來るも

のだと思へば、悲しむべきことでもあるまい。

これは「政治」
の中にある一
節である。

八 北へ南へ西へ東へ

三三六

二十七八年役に伴ひ、北守南進説の出でにき。露獨佛三國の干渉を被り、遼東還附を餘儀なくされ韓國さへ露の勢力の伴ひ、半島二分若くは滿韓交換の論ぜられし程にて、北進は事實上一頓挫を來たし、が、三十七八年役の爲め、曩に還附せし遼東を得、次いで韓國を保護國とし、更に全く合併し、斯くて明かに北進の實の擧がりたれど、而も尙ほ時に北守南進説の口にせられざるに非ず。

最早以前の如く露國を畏るゝ無きも、其の勢力を許容し置かざるべからず、露は最近戰役に疲れしのみならず、獨逸伊三國の同盟に對し權衡を維持するの急務なるあり、日本との協商にて東方の負擔を軽くするを得策とするも、一日

も東方の經營を忘れず、西伯利亞鐵道を複線にし、尙ほ新鐵道をも敷設し、事ある時に大軍を輸送し得るやう準備に怠りなければ、日本に於て北進を是認するとも、現在の領土を保持する外、多く望む所あるを得ず。

朝鮮及び滿洲の一部にして、我が内地の人を移し富源を開發するに適すれば是れのみにて暫らく安んずべきも、人口は内地よりも稀薄なるにせよ、固より無人なるに非ず、特に土地所有權の略定まり、たとへ今後新たに着手すべきの少からずとも、所謂滿韓集中策なる者の聊か覺束なきを認むべし。土地に確かならず、寧ろ肥腴なりとすべきも、北方なる丈け收穫の少く、如何に力を注ぐも得る所知るに難からず。新領地に満足せず別に南進を事とするある、故なしとせず。

鑛山なり、森林なり、南北の差なく、或は北地の利益あることあれど、穀類

想 痕

三三七

は南地の方遙に有利なりとすべし。收穫の一年に二回なるあり、三回なるあり北地に比較し、收穫の四倍するあり。耕作ならずとも、比律賓の如き、米國の東洋經營に於ける根據地たるに拘はらず、日本の労働者の入り込める、既に數千人に及び、概ね少からざる賃銀を得つゝあり。相當の資金ある者にして事業に従事せば内地よりも多く得る所あるべし。更に南なる瓜哇、ボルネオ等、孰れか行いて利を擧ぐべからざらん。朝鮮の如く日本政府の直轄ならず、何かに便宜を缺くも、收入の點に於て確かに優る。

されど、南方とて抵抗なきに非ず。比律賓は勿論、瓜哇とて明かに所領の定まり。或は猜忌の眼を以て監視す。加ふるに我が同盟國たる英國の勢力は、南よりして北漸し、日本に於て南進を事せんか勢ひ印度邊に恐慌を起すを免れず況んや濠洲は日本に悪感を懷き、特に之に對し防備を憂ふる有様にして、南進

の傾向の現はるゝ唯だ益々悪感を高むべし。北方の露國と利益の衝突あるが故に南方に向ふべしとするは、誤るれの甚だしき者、北方に生産の見込あるが如く南方にも生産の見込みあり、恐らく幾層か多く見込ありとして、南に向ふは不可なし。

然るも生産の見込みある、何ぞ北及び南に限らんや。西に亞細亞大陸あり、遠く阿弗利加に及ぶ、朝鮮よりも便利の少けれど、支那四億の民、印度三億の民に對し、商工業上何の利益を得る能はずとは、如何にするも考へ得ざるべく、土地なくとも必ず勞力を償ふあるべし。但だ見るべき利益は僅々數年に望むべからず、順序として小より大に向ふべし。列國は幾年か東亞細亞に利益を競ひ、未だ大に見るべき有らず。而も大に見るべき有らずとて輕忽に附するは聽て臍を嚙むも及ばざるに至らん。阿弗利加は門戸閉鎖の嚴重にして、日本人

想 痕

は印度人同様に取扱はる。地の利の開發すべきの多けれど、急に之を奈何ともする能はず。

一轉して東に向へば南北亞米利加あり。北米合衆國は日本人を排斥するに務め、特に西部に於て甚だし。加奈陀は斯くまでならざれど、尙ほ幾許か之に倣ひ、下便を與ふること少からず。從來我が國人の好んで移らんとせし地域は、斯かる状態にして、窮屈千萬の次第なるが、墨西哥は此と違ひ、移住するに便利なり。延いて南米に及べば、殆ど我が移住民を歓迎する觀ありと謂ふべし。西岸は大に人を容るゝの餘地なきも、アンデス以東アマゾンの漠たる流域は、幾萬人に繼ぐに幾萬人を以てするも、尙ほ足らずこの説あり。巴拿馬運河の竣成する曉、合衆國は太平洋に力を振ふべきも、我れ亦南米に移住し或は新日本を立つるの希望なしとせず。

北守南進説は、清國及び露國に對し、朝鮮遼東を争ひしに基づける者にして北進運動の一段落を告げし今日、一段落を告げたるべき筈、今に於て北に拘はり、若くは南に拘はる、共に誤れり。曾て我が利益を妨ぐるは露國なりしに、今は露國ならず、勢に常なし、唯だ時の宜しきを制すべきのみ。人道に違背せざる限り、國際法に抵觸せざる限り、北に向はんと欲せば向ふべく、南に向はんと欲せば向ふべく、西に向はんと欲せば向ふべく、東に向はんと欲せば向ふべし。捨つる神あれば捨ふ神ありとは、單に個人の事ならず、國家的に社會的に同じく然り。我が日本人の向ふべき所、方角の限定なし。北へ、南へ、西へ、東へ、機會と共に進むべし。

印象 我等は縦横無盡に力を揮つて、國運の伸張を期すべきだ、それが我等の義務だ。

これは「人物」
の中にある一
節である。

九 伊藤公を弔ふ

伊藤公横死の凶報は、世界に於て、マツキンレー氏横死以来の凶報としてし受取られたらん。人の注意を惹ける、略相同じ。而もマ氏は大統領として重きを置かれ、経歴の必ずしも敬重を値せしに非ず。伊藤公の五十年間國家の大事に與かり。國の發展と共に身の榮達を致し、或る點に於て日本文明の代表者たる觀ありしに若かず。マ氏の斃れたる、世は英傑としてよりも大統領として弔ひ伊藤公の斃れたる、世は公爵としてよりも、樞相としてよりも、前統監としてよりも、前首相としてよりも多く得難き英傑として弔はん。

公や最近の官職は樞相なりき。樞相は往々間職視せらるゝも、首相と甲乙なき重職なるを失はず。特に滿洲行は、名漫遊にして、實竊に東洋の平和に期待

する所ありし由其の斃れたるは國家の爲めには勿論、又世界の爲に惜まざるべからず。帝國人なきに非ず、一二人士の死去にて難易を變ずる、萬々之れ有らざるも、大職に斃れし者に向つて、充分に哀悼を表するの適當なるを認む。且つ人なきに非ざれど、人に富めりとせず。英傑公の如きを失へる、遽に補缺を求むる能はず。公の薨去は、人物經濟の上に一の大なる缺陷を生ず。

死といふ死は皆悼むべきも、横死は最も悼むべし。禦ぎ得べきの禦がれざりし也。されど是れ凡人に於て謂ふべく、英傑に於て時に破格の擇ぶべき無きに非ず。公は體質強健、長壽の確かなりしも波瀾多き経歴として、國外に血を灑ぐの、却て最期を壯にしたる跡なしとせず。公に在りては、寧ろ死處を得たる者ならずや、嘗てピスマルクを模擬すこして嘲けられしが、漸く位置の高まり殆ど肩を比するに及びぬ。血は人の同情を引く、萬事に淡泊、而して唯だ君國

と名譽とを念とせし者として豈に始めあり終りあらずや。

印象 公は果して傑物であつたらうか、その面目が躍然として現はれて居るではないか。

一〇 最下層より最上層へ

レールスプリッターとしてのリンカーンの彫塑が、近頃シカゴ戶外彫刻展覽會に出品せられたり。チャールス、マリガンの作なりレールスプリッターは枕木用若くは垣根用の材木を割ること、頻に米國に行はれ、我が國にて言へば薪割りに相當し、彼の像は、薪割りをしてのリンカーンを意味す。其斯かる名を得しは、他の一人と共に薪を割ること日に三千本、驚くべき數に上りしに出づ。薪を割るに努力せしが如く、他の業務に努力し、後大統領となりて同じく努力

これも「人物」の中にある一筋である。

し、最下層より最上層に至るまで、唯だ一を以て貫けり。即ち職分に忠實、能く渾身の精力を注ぎぬ。

此と略々同時代、佛國にチエルあり、ドックの労働者より出で、幾多困難に打ち勝ち、遂に大統領と爲れり。リンカーンと比較し、容貌、性格、及び能力皆な大に違ひ、殆ど正反對なりと謂ふべし。一は長身にして健強、一は短身にして羸弱、一は學ぶ所多からず。而して間を得て學ぶ所悉く消化し健全なる常識に加へて愈々之を健全にし、一は學ぶ所多く、口に筆に人を眩耀し已まず一は歩々堅實、得て失ふこと無く、爲して果さざる無く、一は幾回か波瀾の捲き起れるに投じ、能く之を乗り切り危くして然る後、彼岸に到達し、互に相異なるの多きも、最下層より最上層に登れるに於て同じ。

リンカーンの米國に尊崇せらるゝ、年々高きを加へ、動もすればワシントン

想 痕

を駕して其の上に出づ。ワシントンなり、リンカーンなり、國民の代表者として美むべきもの、健全なる性格とは當に斯かるを謂ふなるべし。されど偉は則ち甚だ偉なるも、若し戦亂なかりせば、彼の如く記憶せられず。或は生涯顯れざらんも測られず。チエルは健全なる性格として此に及ばず、議すべき疑ふべき點少からされど、才氣煥發、居るとして穎脱せざる無く、著述の分量のみも尋常にあらず。帝政破滅の爲めに幸運に向ひしにせよ、泰平の民として確かに泰平を裝飾するに堪へたり。

労働者の大統領と爲れるは、最下層より最上層に登れる者にして、世に此類多からざれど、幾分か之に似たるは少からず。最下層より最上層に登れりと爲すべからざるも、最下層より上層、若くは下層より最上層に登れりと爲すべき者、屢々之れ有り、大統領の多くは下層より最上層に登れる者、若し夫れ最下

層より上層に登れる、大官の如き、富豪の如き、更に遙に多し。眞の能力よりせば、或は下層より上層に進みし者にして大に稱讚すべきあらんも、最下層より最上層に登るに非ずんば、經歷の較著にして活動的人物の標本と認め易からず。

驚天動地なき形容せらるゝは、殆ど悉く最下層より最上層に登りしに限らる。佛にはナポレオン、英にはクロムウエル、共に最下層に非ざるも、到達せる所、大統領より一層以上にして、發展の著るしき、多く歴史に觀るべからず。漢の高祖の如き、匹夫より起り四百年の天下を開ける、大統領の比にあらず。下は愈々下、上は愈々上、距離の遠き丈、傳記を讀む者をして、興味を催さしむること多し。

最下層といひ、最上層といひ、官位の類に限るに非ず。帝王の名なきも、國

家に於て、爲し得べき絶大の事を爲せりと認むべくんば、則ち指して最上層に登れりとすべし。豊臣秀吉は帝王たるの意なく明帝より日本國王に封ぜられ、大に怒り、兵を以て明を覆へさんとせり。而も日本に於て實に爲し得る限りを爲しし者、農夫の子にして此處に到れる。今尙ほ傳記に興味を感ぜらるゝ所以なり。一藤吉郎ありしが爲め、人心を鼓舞せること幾許なるを知らず。志ある者は曰ふ。彼も人、我も人、我豈に空しく朽ち果つべけんやと。其の志を立つるは、即ち力を加ふるなり。

徳川氏三百年、英雄豪傑に乏しからざる筈、而して其の甚だ乏しかりし觀あるは、門閥の鞏固にして、最下層より最上層に登り得ざるは勿論、下層より上層に進み難かりしを以てなり。熊澤蕃山は『憂きことの尙ほ此の上に積もれかし限りある身の力ためさん』と言へりしかば、彼れ自ら充分に力だめしするに

由なかりき。彼をして天保年間に生れしめば、大に明治年間に飛躍するを得たるべし。維新の際、門閥の破壊と共に人多く力を伸ばすを得、英雄豪傑として顯れたる者、預々相接げり。西郷なり、大久保なり、最下層より最上層に登れる者の中に列すべく、伊藤公なり、山縣公なり、亦然りと爲し得ざるに非ず。下層より上層に進めるは、擧げて數ふべからず。

下層は人の居るを欲せざる所、最下層は愈々人の居るを欲せざる所、雷々不愉快なるのみならず、事を成し遂ぐるに不便なり。華族に生れ富豪に生るれば多く勉めずして好位置を得べきが、而も思ふ存分に能力を發揮する點よりせば下は下ほど利益あり、最下層に至りて最も妙を覺ゆ。人の力に限りあり。英雄機會を造るといふも、無より有を出だすべからず、時非にして奈何ともすべからざるも、今は舊幕時代に比して頗る機會に富む。好機會に富む。下層に生る

るとも何かある。最下層に生るゝは必ずしも大なる幸福ならずとせず。

印象 貧兒の世に大名を全うし得たものは、決して少くはない。洋の東

西を通じて然りだ。

一一山と水

語に云ふ、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しみ、知者は動き、仁者は靜か
なりと。語の眞意判然せず、朱注の似たるが故に樂しむといふが如きは疑はし
然るも大體に於て、多少形似無きに非ず。山に居る者は質實にして、水に偏せ
る者は知巧なり。沿海線の比較的長き土地は開化に進むことも急速、我が國の
早く開化せるは瀬戸内海の周邊にして、歐洲の早く開化せるは地中海の周邊た
り。而して水に偏する地に知巧の民多きに反し、山間に僻在せる者の大抵質實

これは「雜」の中にある一節である。

なるは木曾山中の住民の質實にして瑞西國人の亦概ね質實なるを以て推すべし
然れども山に居る者は必ず山を樂しみ、水に居る者は必ず水を樂しむの理なし
之を言ふに至りては抑々謬る。且つ水に居る者の、却て山に往する者より智な
らざることあり。廣東の邊、舟中に生れて舟中に死する者、寧ろ山嶽の縱横な
る巴蜀の住民の知なるに若かず、固と一概に言ふべからざるなり。又知者は動
き仁者は靜かなりと言ふも、孔子の若き、始終動きて席暖かなるに暇あらず、
特に今世の慈善は最も活動を要し、夫のカーネギーの若き、常に動きて止まず
而して軍人は尤も活動すべき者なるに、其の樞軸に居る者は、往々にして尤も
靜止する者たり。モルトケの戦争に臨める、多く一室に屏居して地圖を參看し
自身打電して命令を四方に傳へり。何ぞ一概に言ふべけんや。かの語は畢竟す
るに、強て道理を附會すべき者ならず。注脚を讀むよりも和歌俳句を讀むが如

想 痕

くする。即ち自然に理會し能ふもの有らん。之を試みんか。

印象 山と水とを説いて人物に及び、教ふるに山と水とに親むことを以て

して居る。味はふべきではないか。

一二上と下

人扁に山は仙にして、人扁に谷は俗なり。即ち山岳の頂嶺、冷かにして食の
缺くる處に住するを仙とし、山間の谿谷、温暖にして便利なる處に住するを俗
とす。東人の山と谷とを解する此の如くなるが、西人は更に異なる意味に解し
或る點に於て全く相反す。

西人は山と谷とを以て喻へと曰ふ、モンブランを見よ、高く天に聳え、衆の
齊しく仰ぐ所なるも、四時雪を以て掩も、寒厳しく、風烈しく、何の愉快の感

これも「雜」の中にある一節である。

ぜられず、かの大なる名譽、大なる利益は人皆羨みて已まされざり、之を享有す
る者は、種々の危難に逢着し、怨恨、憎惡、嫉妬、猜忌等、有らゆる惡徳に苦
しめられ、眞に同情を寄せらるゝは極めて少し。媚びて前に周旋するは擧げて
計ふべからざるも、衷心より敬ひ呉るゝに非ず、親子兄弟の間さへ尙ほ甚だ冷
淡、動もすれば毒殺騒ぎを免れず。此に較ぶれば、山麓の人目に觸れざる處は
樹木繁茂、溪流清冽、誠に限りなき愉快あり。眞實の快樂は總じて中腹以下に
在りと。

一は山岳の頂嶺を仙界と爲し、一は名利の巷と爲す。此と彼と大なる相違あ
るも、實は必ずしも然らず。仙人は自在に空中を飛行し、不老不死、如何にも
愉快らしけれど、常に露を吸ひ丹を嘗むといふ。他は權力若くは金力を以て意
のまゝに振舞ふも、絶えて自ら安んぜず、會て和氣の融々たるを覺えず。彼此

想 痕

相ひ異にして、亦大いに相ひ似ずや。

仙と俗と、兩極相合ふと謂ふ可らざるも、山嶺と谿谷との比較に於て、自ら相理會すべき無からず、秦皇漢武の富貴を極め天下を私し、更に仙たらんと欲したる、由る所なしとせんや。

印象 仙と俗と、山嶺と谿谷とを引列して人に論及して居る、眞に味ふべきことではあるまいか。

五 偉人の跡

一 嗚呼有栖川宮殿下

嗚呼有栖川宮殿下、殿下は薨去ありたり。殿下は皇族の梁木に在しまし、ものを傷まさる可けんや。維新以降親王の英武にわたらせらるゝ多く、小松宮は陸軍大將にて近衛師團に長せられ、北白川宮は陸軍中將にて大阪師團に長たらせられ、而して伏見宮は陸軍少將にて青森旅團に長たらせらる。故華頂宮は今頃海軍大將の御身なるべきにと喃つをも要せず、今年の中には親王の海軍少將を見奉るべしと措し測らる。皇族よりして名將斯ほどに輩出ありしは古來例なく、今に於て復た親王の材幹に乏しきを憂ふる能はず、唯皇室のいや盛に盛ならんことを待つべし。されど英才多く在しますも、長短を擧ぐれば多様の評

これは「有栖川」の「親王」殿である。一節で「明治二十八年一月の稿」

偉人の跡

説も出でんが、有栖川宮殿下は智徳兼ね備へさせられ、申すも長けれど至尊に置かせられても特に倚重遊ばされ、他に憚らせ給へる御事も殿下には懇に御下問あらせられしと漏れ承はり、不吉の叡聞に達せしこと如何にか御哀悼あらせられしやと恐察し奉るなり。殿下は英謀を蓄へさせられしのみにあらず、裁斷公正にして品藻敦厚、常に深く人を憫ませられ、九重の雲深き處ために和氣の駘蕩を致せりといふ、宮中再び斯の大人の履音を聴くに由なきか、悲しい夫。嗚呼有栖川宮殿下、殿下は薨去ありたり。殿下は邦家の梁木に在しまし、ものを、傷まさる可けんや。殿下は邦下の大事必ず最要の職に當らせられ、討幕の事あれば、統督に任じ、討薩の事あれば、總督に任じ、帝國を世界に顯揚する征清の偉舉あるに際して、乃ち參謀本部總長として至尊の雄略を贊襄あらせられき。明治の事業は實に殿下の佩刀を以て一貫せられたり、謂ふべし。世に

皮相の美に眩みて内實の效を顧はざる徒あり。會て日の諸遊星を牽引するここを説明せる者を嘲つて曰ふ、日何を以て然る、之を牽引する索繩宜しく何處に於て視るべきやと單に目睹る所を以て事物を推さんとす、胡ぞ其の鄙陋にして窮窟なるや。天言はずして四時行はる、帝黙々たり、民黙々たり、而して國即ち成る。かの繩墨執つて衆に倣ふ者竟に何の力かある。討幕の役西郷隆盛參謀たり。渠素より蓋世の雄、討薩の役山縣有朋河村純義共に參軍たり、二人素より當世の傑、然るも總督の所望以て四方の輿望を維ぐことなく、而して猶能く彼が如く動いて彼が如く功を奏するを得たるか、今回の大役の如き、大元帥陛下の親ら指揮あらせ給ふ所、從來の戦争日と同うして語るべからざると、有栖川宮殿下の出師の鑰匙を祈らせらるゝは、幾ど言を待たざるに非ずや。妄りに川上操六樺山資紀を説くこと勿れ、之を説くは尙可、世の番附類を視るに孰

これは一ビス
マルクとグラ
ツドストン
の一節であ
る。
明治三十三年
四月の稿。

れも伊藤博文を以て其人となさざる有らず、嗚呼潰々者流は寔に度す可らざる哉。

印象

絶えず國事に心を勞させ、國事のために薨じさせ給ふた宮殿下の御風貌が目に拜するやうだ。

二 ビスマルクとグラツドストン

ビスマルクとグラツドストンとは、大政治家として翹然傑出せる、而も性行の反對せる斯くの如きは鮮し。ビは身材巨大、膂力強猛、而して辯に長ぜず。グは軀幹尋常、而して辯に長ず。此の點、藤隈兩氏の二人と肖る所少しく異なり、身材に於て、膂力に於て、隈較々藤の上の在り。唯壯健に於て互に相譲らず。而して辯に於て伯仲の間に在り。而も斯る事は末なるものならん。ビの事

を成すや、常に武力を尙び、議會に於て反對黨を排攘するの要ある、乃ち武力に依りてこれを遂げ、他國に對して自國の利益を計らむとする乃ち武力に依りてこれを達し居常最も焦慮するは、如何にして武力を用ゐて之を壓服し得るの心算にして成熟する、奮然猛進して、打撃殘壞、其の極に到らずんば止まず。グは之に反して最も道理を尙び、議會に在るや、常に此に依り他國に對する、亦此に依り、崎嶇險艱に處し、反抗抵撃に逢着するも、偏へに道理に求め、道理以外に逸して満足すること能はず、藤は善く談じ善く語り、頗る議論を好み力行は本性ならざるも、一たびビに感染してより動もすれば力によりて事を遂げんとし、道理を顧慮するは大抵第二若くは第三第四に落つ。隈はもと必ずしも道理に依る底の人物ならざるも、而も境遇に驅られてや何事にも議論を挾さみ議論を以て打ち勝たんとするの狀あり。則ち兩氏も二人者と、性行に於て相

異するにせよ、斯の如きは又以て肖似せる所と謂はざるべからず。ピの政策を畫する、一に普魯士の位置より打算し、必ず考ふ、如何にして普を強くすべきかと。而して世界人類の上に於て特に考慮するところなく、單に自國の利益を増進するに銳なるために、何様の危害を他に及ぼすをも辭せず。グは英國を念頭に置かざるに非ず、英國の利益のために計らざるに非ず、而も其の政策は、多く世界に於ける道理の上より割出し、場合に據りては英國の利益と見えざる所も猶ほ斷々乎として之を遂行するを厭はず。藤は本來ピの如く國利に熱心ならず。又之を遂行するの辣腕あるに非ざれども、此點に於て彼に感染せる所少からず。大隈は元世界に於ける道理の上より割出さんことを欲するに非ざるも時として之を試みる無きにしもあらず。ピは、官を以て家となし、何事も官を假りて之を成さんとし、己れ一代の事業、皆官に於てし、名譽も、快樂も總て

然らざるは莫し。グは官に重きを置かず、全く平民として世に處し、爵位の類盡く辭せり。藤は何處までも官に頼れるもの、其の今日までの事功は渾べて官に頼りて之を成せり、大隈も家を欲せざるに非ず、虛樂を求めんとするの意なきに非ざるも勢ひの促すところとして、比較的平民たるの形を具へ、平民として成功せし所多し。ピは品行方正に庶幾きも、所謂磊落の態度を有し、飽くまで飲酒し、飽くまで喫煙し、人を傷くること幾十回、グは極めて謹慎嚴格、君子人として恥ぢず、宗教家として最も恰適せり。藤はピと磊落の狀を異にすれども磊落といふに於て則ち似る。隈は、物に拘はらざるの性質あるも身を持つる謹嚴、家居頗る靜肅、寧ろグに類す。

印象　ピ公とグ翁とを對比し、更に藤公隈侯を論じて堂々たる筆致を見るべしではないか。

これは「福澤
諭吉」の
一節である。

三 福澤諭吉と大隈重信

福澤氏の人となり及び其の處世の方法、全く加藤氏の型ならず、同じきを求むる只洋學者の名ありしといふに過ぎず。されど大隈氏と對比する、骨格の違しく相應の腕力ある處相似たり、辯舌に長じ動もすれば詭辯を以て人を壓する處相似たり、理解の早き處相似たり、貨殖に巧なる處に相似たり、徒らに金錢を貯蓄せず能く事業に活用する處相似たり。進んで時勢に順應し、順應すと雖も屈從に甘んぜざる處相似たり。活社會に處し活社會を動かす處相似たり。學校を設立し子弟を教育する處相似たり、新聞を使用し意見を發表する處相似たり、多く部下を育し、其の部下が不平を抱きつゝ服従する處相似たり、部下の弊短よりして誤解を被る處相似たり、事に當りて屈せず撓まず瘦我慢を分とし我慢を得る處相似たり。其他似たる處少しとせず。

明治三十四年
二月の稿
加藤弘の
士のこと
ある。

異なる處を求め來たる、福澤氏の平民的、素町人的、長協差的、無位にして無爵なる大隈氏の貴族的、公卿的、大名的二位にして伯爵なる、即ち相異なり而も前者の馬車に駕し堂々を装ふことある、後者の有ゆる階級に交り倦むを知らざる、亦接近せずとせず、福澤氏の政黨に關係せざる、大隈氏の政黨に關係せる、これ亦相異なり、而も前者と雖も國會開設の詔勅までは政黨に關係し兼ねまじき勢ひにして、若し引續き政界に出で居しならんには、或は一方の首領となりたるやも料られず。其の主我的にして人を融合する能はざるを以て首領たるに適せずとせば、後者も亦充分なる者にあらずとすべし。福澤氏の自ら教場に授業せる、大隈氏の教務を與かり知らざる、これ亦相異なり。而も前者の自ら教場に出でしは久しき以前の事にして、其の直接に教務に關せざる、後者

と撰ぶことなし。後者とても維新前には自ら英語を受け持ちしことあるなり。福澤氏の教育家として感化を及ぼせる、大隈氏の絶えて斯く如きなき、これ亦相異なるとせらるべきも、前者の教育家としての感化は果して如何のものなるかと問ふ、則ち疑ひなきを得ず。拜金宗は必ずしも其の結果に非ざるべく、若し結果なりとせば悪結果なるべし。獨立自尊は方針たるに足るべけれど、其の出で、より日尙ほ淺し、未だ結果を見ず、究竟するに其の學校事業に於ける成功は大なる私立學校を設立し、之を維持し之を發達したりといふに在り。乃ち他の一人も及ばずと雖も尙ほ雁行するに堪へん。

一言に蓋へば福澤氏の以て偉なる所は其の人にあり。瘦我慢を徹ほせるにあり。獨立自尊の模範を垂れたるにあり。而して是れ亦大隈氏に稱すべき所、然れども大隈氏は自ら知らざるの嫌なきに非ず。當る可らざるに當り、成す可ら

これは「李鴻章」の一節である。

ざることを成さんとすること屢次、爲めに失敗せること甚だ多し。福澤氏は此の弊少し。事を創むる概ね成功し中途にして之を廢せるが如き僅々數ふべきのみ、二人均しく自負心に富み、世に云はゆる自惚の骨頂なりとすべしと雖も、福澤氏は其の程度を知り、甚だしきに至らずして已む。獨立自尊としての福澤氏は慥に大隈氏の上に在り。

印象 一方は瘦我慢主義の三田翁、一方は大風呂敷の早稻田の老侯、面目躍如たりではないか。

四 我國の元老者流

清の李鴻章は毀譽紛々たりしかど、兎に角七十九にて歿するまで國務に鞅掌して倦まざりしは遽に類を我國に求めんこと難く、既に過去にも多からざれば

偉人の跡

況して明治に入りて未だ一人の能く比肩すべき者あらず、酷に言へば勞して功なく壽にして辱多かりしとすべけんも、而も其の國家を誤りたる跡あるは、寧ろ國家に誤られたりとして恕すべきが如し。名聲の頓に落ちしは日清戦争よりせるも當時彼の地位より兩國の軍備を比較し、兩國の民情を比較せば、如何にするとも歩を朝鮮に譲るの必要を感じず、たとへ互に示威するに止まり干戈を交へずして終るべしと思惟せんも、まさか旅順を奪はるまでの大敗を取らんとは、云はゆる神ならぬ身の想ひ到らざりし所ならん。彼にして我を避くれば甚だしき怯として謗られしなるべく、多年平和主義を取り來りし身を以て敢て兵を動かすを辭せざりしは、事情の寛恕すべき無きにやらず。不幸にして意外の結果を來し、従らに馬脚を露はすの觀を呈したり。雖も、意氣之が爲に沮喪せず、百敗の後老軀を提けて内外の難局に當り鞠躬盡力死して已みしもの、心あ

る者の以つて憐情を催す所ならずや。之を我が責任を逃るゝに巧なるを以て才能とする者に比する、孰れか國士の分を果せりとする。

我國の元老者流、今多く局に當らず、各々閑職を擇みて悠遊自適する、幾許か老朽淘汰の傾向に由來せんも、斯る傾向は獨り我國のみならず、歐米は更に一層熾なる者あり。然るも彼の地や其の熾なるに拘らず、尙ほ老人にして大事を負擔するもの少しとせず、南阿戦争に際し、英の首相及び遠征總督は實に齡古稀に達したり。我國特に新陳代謝を異にするを以て特色とするとも、多く隱居を造り出し、元老顔して控へ居るもの、益々増加を致すは、要するに慶すべき事ならず、且つ老朽淘汰とは一切老人を無用視するの謂ならず、凡そ職務に適當の年齢あり尉官佐官それ〴〵年齢の定めある如く、文官にも自然年齢の伴へるあり。繁劇の事務に老人の堪へずといふまでにて老人は人間の廢物何の職

務をも帯ぶべからずいふにあらす、政治に堪へ得るものは政治に當りて可、堪へざる者は別に適當の職務を求めて之に従事すべきのみ、職務は決して盡きざるなり。生存しながら働かざる者の多きは、社會にとりて最も不經濟なり。廢物利用ともいふに、廢物ならざる堂々の豪傑は爲すとして必ず效果あらん、何ぞ棄つるの愚をなすべけんや。彼等にして眞に老表して廢物となれる人各職務ありとも、以て病人に迫るを得ざると同じく、之に望むに職務を以てするは、即ち望むの妄なりとせん。されど彼等は實に此の如く老衰せるか、日本人の早老も此の甚しきに至れるか。

隠居するの已む可からざる事あれど、隠居は隠居らしからんこそ殊勝なるべきに、元老流は比較的富裕にして、飽食暖衣逸居し得るがまゝに歳にも耽ぢず酒色に耽りて日を送るあり、偶ま爲すこと有る、乃ち樂屋より後進を操り、

以て陰に權勢を弄せんとし、責任の地に就けよと言はるゝ、則ち避けて當らず人を牽制する勿れと言はるゝ、則ち亦肯んぜず、舅姑根性を縦にして以て自ら博くせんとす。否らざれば商人と結托し、土地を賣買し、ひたすら財を増さんことを計り、財を増して何を爲すべきやを知らず唯財のために財を作り、十萬二十萬と積むのみにして、時に散ずるの必要ある、別に宮中府中の秘庫を稽へ之を利用して已む。

印象 今の元老顔して居る連中に、これを讀ましたら、果してどんな顔をするだらうか。

五 詩的の戦死

中佐は平時に於ても常に軍人の鑑たるのみならず、其の最後に於ても萬世

これは「廣瀬武夫氏」の一首である。三月の作。三十七年

不滅の好鑑を殘せるものと謂ふべし』東郷司令長官の報告に挾まれる此の語、以て中佐を弔ふべし。其の武勇、其の品性、世既に之を知る、また何ぞ贅言を要せん。獨り擔任せし汽船の爆發沈没せる、應に身を以て脱すべきに、一兵士の見當らざるため三たび船内を搜索し遂に敵弾に斃れたりとは豈に謂ゆる詩的の最もなる者ならずや。フキリツブ、シドニーが死に臨みて己れの飲むべき水を兵士に與へしは、四百年後の今日まで美譚とし傳はれるが、史家動もすれば事實を穿鑿して其の實ならざるを言ふ。今や現に中佐の如きあり、人生唯だ腐爛せる形骸にあらざること、是を以て推すべきに非ずや。中佐曾て湯にて洗面せず、曰く以て死後顔色の變ぜざらんことを期す。然るに不思議にも巨弾に中りて遺す所僅かに一片の肉塊のみ、誰か復た顔色の變ぜしと否とを見るを得ん。嗚呼斯の如きは誠に悲惨の極にして又宏壯の極、詩仙あらば宜しく世界に

詠歌すべきなり。

印象 中佐の如きは確かに武人の典型だ、今日の軍人中、幾人の廣瀬中佐があることだらう。

六 才を用ゐるの困難

才は難し、之を用ゐるこゝに一層難し、多才多能の士にして自ら用ゐるの宜しきを得ず、小才と擇ぶなきに終ること、勝へて計ふべからず。萬能餘りありて一心足らざるの語、時として適中するを見る。蓋し人に能不能の別あるも勉めて怠らずんば何程か成就すべく、特に生れながら才能を具ふる者に勉めずして常人に紹出するを得べきが、随つて世に一種の能者あり、或は一事に着手して思はしからず、則ち去りて他に赴き尙ほ又思はしからず、更に去りて他に轉徙

これは「福地源一郎氏」の一首である。三月の作。三十九年

偉人の跡

する間、一々嶮然として頭角を露はさざるあらず。かくて一事に定任せず、絶えず變化を迎ふるは、其の人の自由意志にして實に好機會に遭逢する所以なりと雖も、其の最も不幸とすべきも亦此に在るを忘るべからず。

昨は東、今は西、往くまして可ならざる無きは、夫れ才に富めるに相違なく庸久の企て及ぶべきに非ざれど、此の如きは已れ自らの主たる能はず、才を用ゐるよりも才に用ゐらるゝの嫌あるを奈何せん。國家の統治を要すると同じく個人亦頭腦の統治なきを得ず。萬藝に通すべき才能を屈して之を一事に集注するは、其の人に取って苦痛にして、腕の鳴るが如き心地せんも、此の苦痛を忍ばずんば、生存の方針を定むべからず。プローハム卿は萬能の人、文事に於てマコーレーを壓倒し、政事に於て首相メルボルンを壓倒せんとし、尙ほ科學に於て大發明を企てたりしも、何事も半分を能くすと云はれたり。斯かる人にし

て斯くまで多才ならざらんには、何事か大いに成し遂げ得たるべきに、自ら才能を調節せず、其の逸出する儘に任せるは、獨り其の人のために憾むべきに非ず。

吾人は此點に於て特に福地櫻痴居士を惜しむや切なり。居士は才に於て殆ど天に恵まれしと謂ふべく。何事に接するも不可能を感じず、爲すとして常人以下に降らざりしが、生涯の變化多かりしは全く之が爲とすべきも、才能の割合に結果の善からざりしも他の故ならず、要するに自ら才を用ゐるを難ぜしに出でずや。政治家たらんとし、實業家たらんとし、文學者たらんとし、孰れも少からざる才能を有し、若し政治に専らなれば、伊藤、井上等諸氏に雁行し、少くも子爵を授かりたるべく、若し實業に専らなれば、澁澤、益田等諸氏と比肩し得たるべしと考へらるゝに、實際の經過は全然反對にして、辛うじて一代議

これは「見玉
源太運氏」の
一節である。
明治三十九年
七月の作。

士たりしのみ。文學に於ても天稟の才を發揮せし者なるやは疑はし、若し成功ありとせば、果して何の方面に認むべきか。

印象 才がなくても困るが、また才が有り過ぎて困る、福地翁の如きは正しく後者の一人だ。

七 見玉大將の薨去

大將は計へ歳五十五にて、官は參謀總長、位は正二位、功一級に到れり。人生稀に見るの昇進とすべし。されど其の夙に精悍の名を馳せ非凡の人物と認められしに比例し、急進よりも寧ろ漸進の觀なきにあらず。猫も杓子も男爵となれるに大將の才幹を以てして、大將の出身地を以てして、久しく此に伍し、本年漸く子爵に陞るなき決して早き立身ならず、内閣に列せしは三十三年十二月

陸軍大臣となりしに始まり、後内務大臣に轉じ、文部大臣を兼ね、一時政界を切り廻し、次いで大戦役を執行するに及べるが、若し二十八年腦充血にて人事不省に陥りしまゝ回復せざりしならば、陸軍次官陸軍少將にて終りたるべく、知る者は其才能を伸ばさざりしを惜むにせよ、世は其の今日あるを料らざりしならん。五六年來世が見玉の世の如くなれるは、其の著るしく潛勢力を積める結果なるべきも、又以て其の人物の意外に晩熟なるを推すに足る。

されど大將は功名の絶頂に達せしにあらず、才能の有らん限りを盡しゝにあらず。其の如何の邊に到達し如何の事を成就するやは全く未了の問題に屬せり參謀總長は重大なる職務、當職のものゝ全力を致すべきは勿論以て二十世紀のモルトケたらんは男兒の名譽心たるに價せずとせず。見玉大將にして専ら之を念みせば、亦以て大に爲すること有るに足るべきに、大將はモルトケとナポレ

これは「南洲墓前の祭典」の一節である。

三六
オンの執を擇べるかは、容易に決すべからず。世は其の總理大臣たるの遠きに在らざるを憶ひ、然る場合に必ず大に見るべき者あらんとなし、大將自らも此意なきにあらざりしが如く、山本大將の先後に就じ噂とりとなりしが、政治家として如何なるやの永遠に解決せられずなれるは、人々の頗る遺憾とする所なり。

印象 日露戦争の始まる少し前、今にどんな事をやるか見て居れツ、とある人に向つて云つた大將の顔が目に浮んで来る。

八 南洲墓前の祭典

固より毀譽褒貶に幸あり、不幸あり。板垣死すとも自由死せずの語を遺して冥せしならば、恐らく自由の神として祭られ、或は東洋のワシントンと呼ばれ

明治二十九年六月の稿

たるべし。南洲にして生存し居らば、今の如く崇拜せられざるべしとの説は強ち理なきに非ず。斯かる事の之れ無きを斷言すべからざれど、翁の城山に斃るる、齡正に五十、實に分別盛りにして、是れより大に性格の變すべくも思はれず。子孫のために美田を作らんと欲せば、之に先ちて作り始めしならん、賞典祿さへ二千石、美田を作るの機會は一にして足らざりしなり。唯君國の爲めに鞠躬盡力し、一身の利害を度外に措きしを以て彼の如く生涯を送るの避く可らざりしならん。翁をして天壽を終へしむるも、銅像として立てらるゝは上野公園に於ける遊獵の風に於てせらるべしと察せらる。

翁は死生を超脱し、利害を超脱し、尋常の人事を以て律し難し。我が日本に世界の大人物に匹敵すべき者秀吉の如き、家康の如きあるが、南洲の如き、多く類を見ず。ガリバルディーに似てガリバルディーより大なり、明治の世に斯る人

物の出でたるは、吾人の以て光榮とすべき所ならずや。翁の後進が陸に海に戦功を立て、祭典を墓前に行ふは、本を忘れざる者といふべし。戦捷を以て翁の力に歸するは過ぎたりとせんも、全く棄て、顧みざるも思知らずの嫌ひなからず。若し行賞の川上大將、田村中將の靈に及ぶあらんか、亦翁に及ぶの當然なるを認む。身は逆賊の名を負て斃れ、子は父の勳功を以て侯爵に叙せらるゝ事既に奇、翁自らは斯かる邊に煩はざりしならんも、其の人物を偉とし、其の感化を大とせば、適當の時に適當の敬意を拂はざるべからず。

印象 翁の如き傑物は、とても當代に見るこゝは出来ない。それにしてもあの時逆賊の名をさせたのは惜かつた。

九 ビットの百年祭

これは「ビットの百年祭」である。明治二十九年一月の稿。

ビットは十九世紀初期の英國を飾れる大政治家たり。其の一身を以て内外の困難に當り、屈せず撓まず、飽くまで國威を發揚せんとして盡瘁せし事蹟は人の普く知る所特に茲に絮説するを要せざれど、樞要の地位に立ち能く難局を處せし者、ビット以後一二に限らず。中にも獨逸のビスマルクの如き、實に一層大なる手腕を揮ひし者にして、斯かる點よりせば種々の評論を免れざらんも、ビット一代の經歷を積ふれば、他に多く類なくして而も是非の遽に決し難き點二あり、其の一は少壯にして能く大事に當りたるビットの如き者あらざること是れなり。人は猶ほ學校に在りて試験に汲々たる年齢にして早くも總理大臣と爲り、歐洲紛亂の渦中に投じ、少壯政治家の能く事を堪ふるを事實の上に證明せしが、其の彼が如くなりしの結果して大に歎美すべきやは亦疑はし。ビットは正に二十四歳にして大政を處理したるも、本來極めて早熟の資、兒童たる時よ

り既に大人の風あり、言語動作の小兒らしからざること珍しからず。若し早老に終らざりしならば眞に少壯の爲めに萬々丈の氣を吐く者とすべかりしに、四十八にして身體疲憊し、恰も老衰者の耄死するが如くして逝去せり。由りて察すれば彼は早熟せる一種特異の人物にして、極言すれば一の畸形兒たりしやも料られず。されど少壯にして一國施政の重任に當り、紛亂四集の裡に立ちて、能く大事を成し遂げしを看れば、固より人傑たるを失はず。

其の二は國家の財政を處理するに巧みにして一身の經濟に介意せざりしこと是れなり。謂はゆる志天下の掃除に在り、一室の事何かあらん概、ピットに於て之を見る。生來愛國心強くして、専ら意を國事に注ぎ、偏に國家の利を先にして毫も一身の利を營まず、隨つて國家の爲めに計ること極めて緻密にして、一瑣事といへども苟もせず、爲めに心身を苦めて到らざる莫かりしが、已

れ自らは負債山積し年俸六萬圓時として十萬圓に上りしに拘はらず、死後に及び負債償却料として四十萬圓の支出を議會に決したる、是れ其の全く家計の事に介せざりしが故にして、若し蓄財を念とせしならば、富を造るべき機會は極めて多く、幾百幾千萬の財を積むも難からざりしに、己は則ち釐毛の蓄財するなく、如何に貧するとも絶えて不正の疑ひを受けず、中外の人をして清廉潔白を稱して已まざらしめぬ。其の能く民心を收めて大事を執行し得たる、蓋し偶然ならず、固より常人の企て及ばざる所なり。而も其の公直廉潔、國家の利權を先にし一身の利益を營まざりしは洵に賞讃に勝へたるも、彼の山積せし負債に至りては決して稱すべき事ならず。マコーレー彼を評し、若しベリグレス及びデウキットの至誠に兼ねるに其の質素を以てせしならば、其の徳は一層輝きしならんと言へる、或は肯綮に中れり。但し斯くまで備はらんことを求むるは

酷に過ぎん。

ピットピットの少壯せうさうにして能く大功たいこうを立て、清廉せいぜんにして毫も私利しりを營いまさりしは、他の政治家せいじかの老耄らうぼうして權けんを争あひ、公事こうじを利用して私利しりを計はかるを戒いむるがために生れ出でしに非あらざるなきを得んや。斯この大任たいにんを負おひて天てんより降くだれりと謂いふも謚し美ならず。百年祭ひゃくねんさいは之こが注意ちゅういを喚起くわんきする者なり。されど彼等かれら擾々じょうじょうたる貪汚こんごの老輩らうはいは、ために反省はんせいする程ほどの良心りやうしんありと見えざるぞ憾うらめし。

印象

二十六歳さいで英國えいこくの大宰相だいしやうに任にんじたピットピットの面目めんぼくが颯々さつさつとして紙上しじやうに躍とつて居ゐるではないか。

一〇 藤田東湖の五十年祭

これは「藤田東湖五十年」

東湖とうこは個人こじんとして性格せいかくの尊重そんじゆうすべきも、別に水戸みとの勢力せいりきを代表だいひょうし水戸みとの思想しきさう

藤田東湖の一節で
十月の作。

を實現じつげんせし者もの、水戸みとの盛衰せいすいに伴ともひ聲望せいぼうの消長しょうぢやうを來きたすを免まぬれず。水戸みとの衰弱すうじやくせしは即すなはち其そのの後世こうせいに於おける松陰しょういんの如ごとくならざる主ななる原因げんいんなり。而しかも水戸みとの一盛せい一衰すいは勢いきの避さく可べからざりし所ところにして、初はじめより彼かれの如ごとく推おし移うつるべく定さだまれり、水戸みとは形態けいたいに於おて幕府まくふに屬ぞくし、精神せいしんに於おて勤王きんわうを事こととし、平素へいそ何等どうらう相悖さうはいるなきも、一旦いつたん故障こうじやうの起おり、二者しやの關係かんけいを紊みだすや、頗おる進退しんたいに苦くるまざるを得えざりき。源平げんへい以來いらい、實權じつけんと名分めいぶんと別わかれ、朝廷てうていに軍隊ぐんたいなく、幕府まくふに爵位しゃくゐなく、時ときに變化へんがあるも、概おして兩立りやうたつの認みめられ、朝廷てうていより敬うやまふべき無く、幕府まくふより畏おそるべき無しとせらる。足利あしかが氏の功臣こうしん土岐頼遠とぎよりとほも院いんを凌辱れいじやくせしとて斬首ざんしゆの刑けいを受うく。織田おだ氏し、豊臣とよとみ氏しを經へ、徳川とくがわ氏しに入りて、事益ことえき々整ととのひ、三國さんこくの大名だいめいも路みちに貧ひんせる公卿こうけいに會あひ、輿こを出いで、拜禮らいらいし、以もつて奇異きいとせず、奇異きいとする者ものも公卿こうけいの空威張からかひりこして明あけて通とほすの有様ありさまなりき。封建てんけんは斯かかる状態じやうたいにて存在そんざいし持續ちきよくせしが、

水戸は其由來を尋ね、現に務むべきを明晰にし、更に將來に亘りて示す所ありいはゞ經典を作り、自ら遵奉し、併せて國民に宣布したり。幕政を合理的に解釋すれば、水戸の試みしが如くなりと謂ふべし。然るに對外的關係よりして國勢の一變し、主權の所在を明白にするの必要を生じ、幕府に密接なるは幕府を主とするに傾き、此に疎遠なるは朝廷を主とするに傾けり。水戸は情縁を佐幕にし、主義を勤王にし、前者の爲にせば大義に背き、後者の爲めにせば至情に背き、其の孰れにも偏する能はず、義を枉ぐるか情を矯むるか、自ら決定すべき場合に臨み、相抵排し、相殺傷して盡くるの已むを得ざるに及びぬ。幕府創設の當初、重盛忠孝兩全を難んじ死を祈りしと同じく、幕府の破滅せんとせる、水戸先づ自滅を敢てせり。其の自滅せしは、幕府の爲に割腹し、之をして行くべき道に行かしめしなり。七百年持續の最後を壯にせしは水戸の自滅にし

て、次いで起れる戦争の如き、其の餘波に過ぎず。それがあらぬか、因果應報の拘るべきにあらされど幕府の後を受け、新政體の下に最榮位を受くるは紀州にあらず。尾州にあらず、水戸藩士の遺子其人なり。東湖は波瀾の極まらざるに先だち、有る限りの力を盡くして之を緩和せんとし、而して震災の爲めに斃れしが、或は斯くして刺客の毒手を免れしを幸なりとせん。幕政と維新との過渡期、東湖は正に其全部を代表せり。

印象 水戸に東湖のやうな人物が居つたから、今日の水戸家を見ることが出来たのだ。

一一 伊井直弼と森、屋

森有禮は大政に與らず、與りしも閣員の一人として、主とするは文政に

偉人の跡

これは「井伊直弼」の「岩倉大久保」の「森」の「一節」である。明治四十二年七月の稿。

限られたり。權臣を殺し國政を變ぜんといふ壯士の趣意に吻合せざるも、異を好み、奇を衒ひ、大事を誤るかに疑はれぬ。されど大政の衝にあらざる文け、要撃する者も幾許か直弼等と違はざる能はず。徒黨を組みて途に要するよりは單身邸に入り、而も刀を以てせず、庖丁を以てせんとせり。事を誤解すること甚だしく、森に取りて誠に氣の毒の事なりしかど誤解も空しく起らず、幾分か人をして身命を抛たしむべき誘因なかりしに非ず。己れの信ずる所を執して動かす攻撃の百出を厭はざるは、豪とするに足るも、事體の大小を識別するに長ぜず、動もすれば事の末に拘泥し、大事の如く決行せんとせる、常人より觀て頗る異様に感ぜられし無きにあらず。大政に當りて如何なるべきやの判明せず全く當り得ざるに非ざるも、適任なりと謂ひ難し。直弼に較べて見識は遙かに之れ有り、國情の紛々たる際、時局を察するを難んぜず、恐らく自ら開港を

認し、人をして之を是認せしむるに務めたらんが、物議を醸すこと直弼に過ぎたらんも知るべからず。場合に依り鎖港に傾き、之を斷行せざるを保證する能はず、案外注意深くして妄りに無謀の舉に出でざると、大政を處するに於て直弼と孰れが優るを決せんは容易にあらず。自ら人を見るの明ありとし、屢々抜擢せしことあれど、眞に有用の材たりしは寧ろ稀れなりき。直弼も人を知るの明ありしと爲すべからず。二人に相似たる所少く、之を比較するの無理なれど共に大政に當るの適材ならざりしとせん。

星亨は森と同じ一人の兇刃にて斃れしが、大臣として殺されず、政界の惑亂者として殺されしなり。曾て大臣たりしも、横死の當時大臣たりしに非ず。大臣たらざるも大臣の上に出で、時として首相をも動かさし、勢力を張ること近來稀に見る所なりしとす。林董の曰ふやう、大久保以後、唯星一人のみと、蓋し

自ら信ずる所を行ひ、而して能く勢力を張り得たるに於て相類せりとするなるが、星をして直弼の位置に在らしむれば何状なりとする、見識に於て手腕に於て、直弼に優るや明けし。國是を決定し、列侯を操縦する、或は大久保に優るべく、直弼に優ること遠かるべし。彼は明治年間よりも安政年間に活動すべかりし者、之に先ちて生れざりしを憾まざる能はず。國是を決定して宜しきを得るや、列侯を操縦して宜しきを得るや、事頗る疑はしく、成は誤れるの甚だしからんも、直弼の敢てせしに劣るべくもあらず、權を貪り、財を貪り、到らざるなきも明治に入りてこそ大なる弊害を及ぼしたれ、非常の時に於て非常の功を立つるに利なしとせず。權を貪るは國政の統一に益し、集めし財を散らす運動を敏活にするに益すべし。星をして直弼の位置に居らしめしは、彼が爲めに眞に不幸なりしなり。直弼も明治年間に居らば、堀田岡部等の位置を占むるに

堪へん。星は明治年間に在りて唯だ政界を腐敗せしむるに終り、直弼は安政年間に在りて幕府の運命を縮むるに終り、雷に閣員に貢献し得ざりしのみならず自らの破滅を招きて已みにき。

印象

直弼と云ひ、森と云ひ、星と云ひ、何れも人手にかゝつて仆れた人達だが、その性格を見るべしではないか。

一二人物の段階

勇と智と人に於て必然的なるにせよ、以て功を立つるに境遇の利不利あり。獨りの力を探ぶなきに非ざるも、大抵幾許か多數人の人を假り、多數人に依りて事を成すの跡なしとせず。軍人若くは政治家としての活動に、大は則ち大、眞に蓋世の雄を以て目すべきあれど、内情を査察せば、多數人の運動に従ひ、

これは「人物の段階」の節である。